

九州大学大学院言語文化研究院

第3期中期目標・中期計画成果報告書

2022 年 9 月

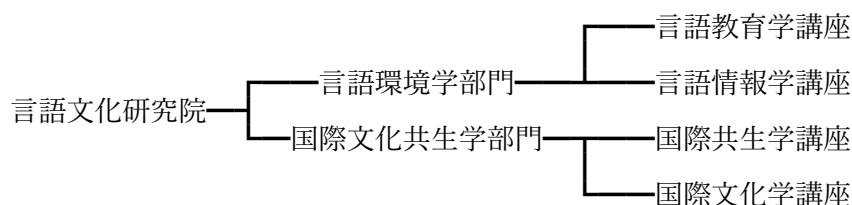
目次

前書き	3
言語文化研究院第3期中期目標・中期計画	4
研究	7
科研等外部資金と学内競争資金の推移	7
著書、論文類、口頭発表等の件数の推移	9
顕著な成果	12
他機関や民間との共同研究・異分野共同研究	16
部局内の出版や研究会活動	20
学会活動	29
受賞	27
公開講座・講演会等	27
教育	29
言語文化科目のカリキュラムとその改革について	29
外国語異文化学習を支援する行事	40
高校教科書への関与	46
マルチリンガル交流スペース等	46
外国人留学生のTA	47
学府担当	47
共創学部担当	47
その他の授業担当	48
国際	52
交流協定の概要	52
教育上の国際業務	53
その他の国際研究者交流	55
国際協力	56
社会連携	57
その他	58
事務・管理体制	58
管理経費節減	58
自己・点検評価	58
法令遵守、安全衛生等	59
FD	59

九州大学大学院言語文化研究院第3期中期目標・中期計画成果報告書

【前書き】

言語文化研究院は九州大学の大学院研究組織である研究院のひとつであり、下記のような内部構成となっている。



教育としては主に基幹教育の言語文化科目を担っており、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語を担当している。所属教員の中には学部（共創学部）にも所属もしくは科目担当教員として学部教育に携わっている教員や、大学院教育組織である学府（地球社会統合科学府、人間環境学府、経済学府等）にも所属して大学院教育に携わっている教員もいる。

本研究院の第3期（2016-2021年度）中期目標・中期計画（大学HPで公開されている）期間の終了にあたり、大学に報告書を提出することになるが、その目標・計画14番の成果指標として「部局の教育研究活動、国際交流活動状況、部局の教育研究活動状況公開」「教育研究活動の活性化と質の向上、教育研究活動に関する外部からの評価」が設定されている。本文書は、大学への報告書の基礎となる資料として作成された原簿に基づき、活動内容についての公開文書とするものであり、さらに外部評価者による「九州大学大学院言語文化研究院第3期中期目標・中期計画成果報告書に対する外部評価意見報告書」（本資料の末尾に採録）の基礎資料となったものでもある。

また本文書は、本研究院の自己点検・評価委員会の統括のもと、諸委員会と令和3年度の執行部等において執筆・編集されたものである。公開にあたっては、広報委員会のチェックを受け、本研究院総務会、本研究院教授会での審議を経て同意を得た。

* 自己点検・評価も兼ねるため、計画番号毎の記述とはなっていない。

* 本研究院第3期中期目標・中期計画の一覧表を第4頁から第6頁に記す。

言語文化研究院 第3期中期目標・中期計画

前 文

言語文化研究院は、世界の多様な言語と文化と社会について実践的・理論的研究を推進し、その成果に裏打ちされた言語・文化教育を通して日本及び国際社会の発展に寄与することを基本理念としている。この理念のもとに、多様な言語・教育・文化・思想の研究者集団としての言語文化研究院の強みを活かしつつ、自然科学、社会科学、人文科学という従来の枠組みを超えた研究・領域横断的なプロジェクトを推進し、グローバル化社会に即応した研究拠点を形成する。

教育においては、教材開発、カリキュラムの見直し、外国人教員の登用拡大等を通して、グローバル人材の育成に、より資する外国語教育を推進する。新学部等における学部教育、地球社会統合科学府、人間環境学府、経済学府、人文科学府等における学府教育に積極的に参与する。

部局間交流協定の締結等を通して、海外の研究者との交流を拡大し、研究の国際化を推進する。学生の海外留学を支援・促進するため、海外留学支援教育システムを構築する。

目標 番号	中期目標	計画 番号	中期計画	成果指標		対応する 全学の 中期計画 番号
				結果	成果・効果	
	I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標		I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための とるべき措置			
	1 教育に関する目標		1 教育に関する目標を達成するための措置			
	(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標		(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標を達成するための 措置			
	① 学士課程		① 学士課程			
1	平成29年度における学士課程カリキュラム見直しに向けて、英語については平成26年度から実施している体系的な新学術英語カリキュラム(Q-LEAP)における理念を踏襲しつつ、初修外国語については多様化する世界において学生が活躍するために必要な外国語教育を目指して、各外国語の授業を再編していく。	1	平成29年度からのクォーター制導入に向けて英語・初修外国語ともにカリキュラムの見直しを行う。平成29年度から新しく作成されたカリキュラムを実施していく中で、新制度の再検証を行い、より効果的なカリキュラムに再編成していく。	英語・初修外国語カリキュラム改訂	カリキュラム改訂による外国語教育の効果と質の向上	1
2	英語・初修外国語ともに、学生の自律学習に対する動機づけを高めるため、外国語教育のWeb化を進めていくとともに、学生のモチベーションを高める対面指導を実施していく。	2	英語・初修外国語ともに、学生の自律学習を支援するため、Web教材の充実、e-ラーニングの充実を図っていく。英語・初修外国語教員が協力して開催してきた外国語プレゼンテーション・コンテスト、海外の大学と共同で行ってきたディベート活動等をより充実させる。	Web、コンピューター等を使用した効果的な授業推進（プレゼン・コンテスト等の参加者数）	Web、コンピューター等を使用した外国語教育の効果と質の向上（プレゼン・コンテスト等の参加者増加、レベル向上）	2
3	外国語教育の責任部局として、トップグローバル研究・教育拠点創生のため、学生の海外留学支援を行う。従来から言語文化研究院が実施してきたケンブリッジ大学への英語学術研修、連携実施してきた中国語および韓国語の短期語学留学、ドイツ・インターンシップ研修等の留学支援を拡充させ、より体系的に学生の海外留学を支援する。	3	言語文化研究院は従来から箱崎分室において、外国語学習を希望する学部生・大学院生を対象として言語文化自由選択科目を開講してきた。箱崎分室はキャンパス移転完了と共に閉室となるが、新文系キャンパスに設置予定の外国語学習室において、外国語学習の継続を希望する学部生・大学院生を対象として言語文化自由選択科目の後継科目を開講し、また海外留学を目指す学部生・大学院生に対して留学支援のための体系的な外国語教育を実施する。	留学支援事業の推進・強化（外国語学習室の開設、高年次受講者数）	高年次受講者数の増加、海外留学者数増加	3
	2 研究に関する目標		2 研究に関する目標を達成するための措置			
	(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標		(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための 措置			
4	言語教育・多言語・多文化についての研究者集団としての強みをさらに発展させるため、内外の研究機関から研究者を招聘し組織的・継続的な研究交流を推進する。	4	各部門・講座・研究グループ等の単位で外部資金（科研費、海外研究者招聘制度助成金など）を確保し、国内、国外から一定期間、研究者を招聘し、講座・部門、言文全体を単位とした専門的研究交流、また異なる分野の研究交流を行う。	国際的研究活動、共同研究状況	共同研究活動活性化、成果向上	12

目標 番号	中期目標	計画 番号	中期計画	成果指標		対応する 全学の 中期計画 番号
				結果	成果・効果	
5	多様な言語・教育・文化・思想の研究組織としての強みを活かしつつ、領域横断的な異文化融合研究を推進する。	5	各部門・講座・研究グループ等の単位で領域横断的共同研究を創出し、研究拠点を形成する。拠点形成にあたっては、他研究機関、海外の大学等に所属する研究者との共同研究を積極的に推進する。	領域横断型、異分野融合型研究状況、共同研究状況	領域横断型、異分野融合型研究の推進による人社系研究の社会的評価向上、共同研究成果向上	14
6	(2)研究実施体制等に関する目標 女性研究者、外国人研究者の教育研究への積極的参画を促進するための環境整備を行う。 女性教員、外国人教員の登用を推進する。	6	(2)研究実施体制等に関する目標を達成するための措置 女性研究者、外国人研究者を積極的に採用し、また女性教員、外国人教員の管理職への登用を推進する。FD等の活動、部内における業務・人員の適正配置等を通して部局の教育研究環境をさらに改善し、教育研究活動その他の業務における女性教員、外国人教員の比重を高め、部局全体の教育研究力の向上を図る。	女性教員数、外国人教員数	女性教員、外国人教員の比率の増加、教育研究環境適正化	18
4 その他の目標						
(1)グローバル化に関する目標						
7	短期留学プログラム及び語学研修プログラムを充実させ、参加学生数の増加に貢献する。 留学生の受入れを積極的に支援する。	7	ケンブリッジ大学英語・学術研修、中国語海外語学研修、韓国語海外語学研修、ドイツ・インターンシップ研修等の海外研修事業を継続・発展させ、参加学生数を増加させる。留学生の受入れについては、地球社会統合科学府等と連携し、大学院生および研究生の受入れを積極的に図る。	派遣学生数	海外留学生数増加	21
8	部局間交流協定の締結等を通して、教育研究の国際交流を拡大・充実させる。内外の国際交流事業に積極的に参画する。	8	上海外国語大学、北京外国語大学、イルクーツク国立大学等と積極的に研究者の交流を行い、共同プロジェクト、国際会議を立案する。フルブライト・プログラム等、学外の国際交流事業に積極的に参画する。	国際的共同研究状況、研究者の国際交流状況	国際的教育研究活動件数、国際誌掲載論文増加	22
9	国際協力活動を推進するため、内外の国際開発協力推進ネットワークに積極的に参画する。	9	内外の国際開発協力に関するネットワーク構築に加わり、同時に、所属教員の専門性を活かした国際的なプロジェクトに参画する。	国際協力体制の構築、プロジェクト参画	国際協力活動拡大、参画プロジェクト増加	23
10	学術分野の多様性を活かした国際連携、研究総合大学としての層の厚い教育研究、アジア戦略の成果に立脚した全方位世界展開に貢献するため、海外の大学との部局間交流協定並びに学生・教員の海外研修・派遣を継続・発展させる。英語による教育研究に加えて、これまでのアジア戦略で充実させてきた中国語、韓国語等の教育研究を推進し、また英語以外の初修外国語の特に高年次生・大学院生への教育を強化し、多言語・多文化への深い理解力を持つグローバル人材を育成する。大学のレピュテーション向上に裨益すべく、国際的な教育研究力を有する教員を採用する。	10	上海外国語大学日本文化経済学院学術交流協定、北京外国語大学北京日本学術研究センター学術交流協定、イルクーツク国立大学人文・外国語・メディアコミュニケーション研究所学術交流協定、ケンブリッジ大学ペンブロークカレッジ学術交流協定等を通して、学生・教員の派遣及び学生・教員の受け入れを推進する。グローバル人材の育成という観点から、外国語学習と実践のモチベーションを鼓舞する、外国語プレゼンテーション・コンテストその他の教育活動を継続・発展させる。文系新キャンパスに開設予定の外国語学習室において、留学準備及び帰国後の学習継続のための高度な外国語教育（英語及び初修言語教育）を実施する。部局の研究力を強化するため、高い研究力を有する博士号取得者を積極的に採用する。国際的な研究力強化をはかるため、特定プロジェクト教員の中から、国際的な研究力を有する研究者を承継教員として採用する。	海外研修等参加学生・教員数、外国語プレゼンテーション・コンテスト参加者数、外国語学習室における教育活動（外国語学習・留学相談件数、留学支援授業受講者数）、科研費採択率、博士号取得者数、国際誌掲載論文数	海外研修等参加学生・教員数増加、外国語プレゼンテーション・コンテスト参加者数増加、外国語学習・留学相談件数増加、留学支援授業受講者数増加、・科研費採択率向上、博士号取得教員比率増大、国際誌掲載論文増加	26

目標 番号	中期目標	計画 番号	中期計画	成果指標		対応する 全学の 中期計画 番号
				結果	成果・効果	
	II 業務運営の改善及び効率化に関する目標		II 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置			
11	1 組織運営の改善に関する目標 (人材) 交流協定校あるいは内外の交流事業を通じて、外国人教員を招聘する。外国語教育における外国人教員の比率を高める。	11	1 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置 (人材) 外国人教員の比率を高め、さらにTAとして外国人留学生を積極的に登用する。特定プロジェクト教員の中から教育研究力においてすぐれた教員を承継教員として採用する。	日本語以外の言語を母語とする教員数、TA数、外国人教員の適正な配置	外国人教員の比率増加、国際的教育研究活動の拡大、国際誌掲載論文の増加	41
12	3 事務等の効率化・合理化に関する目標 業務内容及び事務体制の見直し等により、部局事務の効率化・合理化を推進する。	12	3 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置 文系地区の伊都キャンパスへの移転の進捗状況等及び教育研究組織の改変等に合わせ、文系地区の事務体制の統合再編を行うとともに、業務のあり方を継続的に見直し、業務の効率化・合理化等の業務改善を図る。	事務組織の統合再編、業務改善	統合再編による合理化、業務の効率化	43
	III 財務内容の改善に関する目標		III 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置			
13	2 経費の抑制に関する目標 限られた部局予算を有効なものとし、効率的な運営を目指すため、部局の管理的経費の抑制を推進する	13	2 経費の抑制に関する目標を達成するための措置 全学的な既存業務や調達方法等の見直しに沿って、部局管理業務の仕様等の見直し及び光熱水費等の節約を進め、さらなる管理的経費の抑制を図る。	光熱水費の削減、管理的経費の削減	部局予算の有効活用、効率的な部局運営	45
	IV 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標		IV 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置			
14	教育研究活動の向上と活性化とに寄与する自己点検・評価活動を定期的に行う。また部局の教育研究活動状況を継続的に公開・発信する。	14	部内の自己点検評価委員会を中心として、定期的に部局構成員の教育研究活動、国際交流活動等の状況を調査し、その結果に基づいて、教育研究活動、国際交流活動の活性化を促進する方策を導入する。ホームページ、刊行物等により、部局の活動状況を継続的に公開・発信する。	部局の教育研究活動、国際交流活動状況、・部局の教育研究活動状況公開	教育研究活動の活性化と質の向上、教育研究活動に関する外部からの評価	48
	V その他業務運営に関する重要目標		V その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置			
15	2 安全管理に関する目標 部局の環境安全衛生管理体制を強化し、構成員の安全と健康を確保する。	15	2 安全管理に関する目標を達成するための措置 部局の業務分掌、人員配置、安全衛生管理体制を定期的に検証し、職場環境の安全衛生を確保・維持する。	部局の職場環境の安全衛生状況	良好な教育研究環境の確保・維持	53
16	3 法令遵守等に関する目標 部局構成員の法令遵守の徹底を推進する。	16	3 法令遵守等に関する目標を達成するための措置 法令遵守への意識の向上を図るため、法令遵守に係るFD等を実施する。日本語を母語としない構成員に対する法令遵守支援体制を整備し、部局全体の法令遵守基盤を強化する。	教育研究活動における、法令遵守体制の確立・維持	部局構成員の法令遵守意識の向上、適切な教育研究活動の展開	54

【研究】

・ 科研等外部資金・ 学内競争資金の推移

中期計画 10 の成果指標として「科研費の採択率向上」がある。また、中期計画 14 には「定期的に部局構成員の教育研究活動、国際交流活動等の状況を調査し」とあり、科学研究費等の取得状況の把握は重要である。

第 3 期（平成 28 年度～令和 3 年度）の科学研究費の申請率（当該年度において受給しているかもしくは次年度に向けて申請した）は表 1 の通りであるが、令和元年度～3 年度は分母に休職中の教員 1 名が含まれているため、実質的な申請率は第 3 期後半になって上昇しているとも言える。

＜表 1＞科学研究費申請率の推移

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R01 年度	R02 年度	R03 年度
対象人数	42	41	43	41	40	40
申請・受給人数	41	38	41	39	38	39
申請率	97.6%	92.7%	95.3%	95.1%	95.0%	97.5%

獲得状況の推移は表 2 の通りである。各年度において受給している件数を表しているが、第 3 期期間中に件数が伸びているとは言い難いものの、概ね堅調に推移していると言うことはできよう。

＜表 2＞各年度における科学研究費取得状況の推移

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R01 年度	R02 年度	R03 年度
基盤研究 B	4	4	5	4	4	2
基盤研究 C	12	14	10	10	14	13
国際共同研究強化 B			1	1	1	1
挑戦的萌芽	1	1	1			
若手研究				1	5	8
若手 B	5	9	8	4	1	
研究スタート支援	1					1
学術図書				1		
合計	23	28	25	21	25	25

科学研究費以外の外部資金獲得の実績は表 3 の通りであり、人文系の部局としては、実績があること自体が評価できるものと考えている。

<表3> 科学研究費以外の外部資金獲得実績

年度	団体	題目	氏名	金額 千円
H28年度	統計数理 研究所	イベント・スキーマと構文に関する研究	内田論(分担)	100
H29年度	KDDI財団	言語教育支援のための文章難度自動調整機構	内田論(分担)	1,000
H29年度	統計数理 研究所	言語統計を用いた認知言語学研究へのアプローチ	内田論(分担)	120
H30年度	KDDI財団	言語教育支援のための文章難度自動調整機構	内田論(分担)	1,000
H30年度	統計数理 研究所	コーパスに基づく用法基盤モデルの実践	内田論(分担)	48
H30年度	シーマン人工 知能研究所	モデル言語および自動発話システムによる言語処理エ ンジン開発のための日本語文法の再定義と体系化	内田論(代表)	2,500

この他、九州大学内の競争資金にも積極的に応募しており、表4にある資金の獲得に成功してきている。

<表4> 学内競争資金の獲得実績

年度	資金名	題目	氏名	金額 千円
H28年度	QRプログラム つばさプロジェクト	文学から見るリスクマネジメント	下條恵子(代表) 内田 論(分担)	1,531
H28年度	QRプログラム つばさプロジェクト	双方向的な議論能力を測定するための 議論可視化モデルの開発	井上奈良彦 (分担)	0
H28年度	QRプログラム つばさプロジェクト	多次元型「ラウンディット」・テキストマイン グ(MGTM)を用いた「企業の社会的責 任(CSR)」の異分野融合研究	内田 論(分担)	0
H28年度	基幹教育の質の向上 に資する取組	外国語「レベニュー・コンテスト	中里見敬(分担)	450
H28年度	基幹教育の質の向上 に資する取組	多文化共生キャンパスの創出と留学を視野 に入れた初修外国語教育の活性化	中里見敬(分担)	40
H29年度	QRプログラム わかばチャレンジ	学術論文調査のための論文内容の比較 手法に関する研究	内田 論(分担)	1,125
H29年度	QRプログラムⅢ.特定領域 強化プロジェクト(人・社系)アジア 研究活性化重点支援	新資料発見に伴う東アジア文化研究の多 角的展開、および国際研究拠点の構築	中里見敬(代表)	2,000
H30年度	教育の質向上支援 プログラム(NEEP)	アカデミック・ライティング & レベニュー教材 開発—英語で科学するアクティブ・ラーナー育 成に向けて—	鈴木右文(代表)	1,296
H30年度	QRプログラム つばさプロジェクト	クリティカルシンキング教育に有効なアクティブ・ラー ニング型教材アプリの開発・検証	内田 論(代表)	140
H30年度	QRプログラムⅢ.特定領域 強化プロジェクト(人・社系)アジア 研究活性化重点支援	新資料発見に伴う東アジア文化研究の多 角的展開、および国際研究拠点の構築	中里見敬(代表)	3,700
R01年度	教育の質向上支援 プログラム(NEEP)	アカデミック・ライティング & レベニュー教材 開発—英語で科学するアクティブ・ラーナー育 成に向けて—	鈴木右文(代表)	986
R01年度	QRプログラム つばさプロジェクト	クリティカルシンキング教育に有効なアクティブ・ラー ニング型教材アプリの開発・検証	内田 論(代表)	120
R01年度	RINK Progress 100 人・社 系学際融合リサーチハブ形成	English in Contact	S. Laker(代表)	3,448
R01年度	QRプログラム わかばチャレンジ	Visualizing language change in multiple datasets using computa- tional tools	S. Laker(代表)	1,050

・著書、論文類、学会発表等の件数の推移

中期計画 14 には「定期的に部局構成員の教育研究活動、国際交流活動等の状況を調査し」とあり、著書、論文類、学会発表等の状況の把握は重要である。

著書の発表状況は表 5 の通りである。年度によってばらつきはあるが、堅調な状況であると言することができる。

<表 5> 発表された著書

H28 年度：22 点	
①	東森勲、他（共著）、 <u>大津隆広</u> 、他（分担執筆）、シリーズ＜言語表現とコミュニケーション＞第 2 巻『対話表現はなぜ必要なのか』、朝倉書店。
②	九州大学大学院言語文化研究院 学術英語テキスト編集委員会（著）、 <u>大津隆広</u> 、 <u>内田諭</u> 、 <u>松村瑞子</u> 、 <u>横森大輔</u> 、 <u>土屋智行</u> 、 <u>志水俊広</u> 、 <u>下條恵子</u> 、 <u>岡本太助</u> 、 <u>Matthew Armstrong</u> 、 <u>Jonathan Aleles</u> 、 <u>Michael Guinn</u> （分担執筆）、 <i>Authentic Reader - A Gateway to Academic English</i> 、研究社。
③	<u>松村瑞子</u> 、 <u>单艾婷</u> （共編）「日本語会話談話資料および文法語彙資料」、九州大学大学院地球社会統合科学府。
④	<u>細谷行輝</u> 、 <u>鈴木 右文</u> 、 <u>土屋 智行</u> （共著）、『 <u>アケイブ</u> ラーニング を強力にサポートする WebOCMnext 2017 年度版 九州大学基幹教育言語文化科目「学術英語 1 CALL-A/B」受講案内書』、成美堂。
⑤	<u>野村恵造</u> （監修）、 <u>内田諭</u> 、他（共著）『ビジョン・クエスト総合英語 Ultimate』、啓林館。
⑥	<u>野村恵造</u> 、 <u>内田諭</u> 、他（共著）『Vision Quest English Expression I Advanced: Revised』、啓林館。
⑦	<u>野村恵造</u> 、 <u>内田諭</u> 、他（共著）『Vision Quest English Expression I Standard: Revised』、啓林館。
⑧	<u>野村恵造</u> 、 <u>内田諭</u> 、他（共著）『Vision Quest English Expression I Core』、啓林館。
⑨	<u>野村恵造</u> 、 <u>Jean Moore</u> 、 <u>Caroline E. Kano</u> （編）、 <u>内田諭</u> 、他（専門執筆）『オーレックス和英辞典第 2 版』、旺文社。
⑩	旺文社編、 <u>内田諭</u> （コラム執筆）『暗記で合格英検 2 級』、旺文社。
⑪	旺文社編、 <u>内田諭</u> （コラム執筆）『英検 2 級集中ゼミ』、旺文社。
⑫	旺文社編、 <u>内田諭</u> （コラム執筆）『英検 2 級出る順合格問題集』、旺文社。
⑬	旺文社編、 <u>内田諭</u> （データ分析・語彙選定・コラム執筆）『TEAP 英単語ターゲット』、旺文社。
⑭	<u>片岡邦好</u> 、 <u>池田佳子</u> 、 <u>秦かおり</u> （編）、 <u>横森大輔</u> 、他（分担執筆）『コミュニケーションを粹づける一参与・関与の不均衡と多様性』、くろしお出版。
⑮	<u>中里見敬</u> 、 <u>岩佐昌暲</u> 、 <u>李怡</u> （共編）『桌子的跳舞：「清末民初赴日中国留学生与中国现代文学」日中學術研討會論文集』上・下（ <u>民國文化與文學研究文叢 六編第 2, 3 冊</u> ）、花木蘭文化出版社。
⑯	<u>秋吉 收</u> （単著）『魯迅—野草と雑草—』、九州大学出版会。
⑰	<u>藤井省三</u> （編）、 <u>秋吉收</u> 、他（分担執筆）『世界各国魯迅研究精選集 日本魯迅研究精選集』、中央編訳出版社。
⑱	<u>下斗米伸夫</u> 編著、 <u>佐藤 正則</u> 、他（分担執筆）『ロシアの歴史を知るための 50 章』、明石書店。
⑲	<u>石橋正孝</u> 、 <u>倉方健作</u> （共著）『あらゆる文士は娼婦である 19 世紀フランスの出版人と作家たち』、白水社。
⑳	<u>阿部俊大</u> （単著）『レコンキスタと国家形成—アラゴン連合王国における王権と教会』、九州大学出版会。
㉑	<u>山村ひろみ</u> （単著）『スペイン語 24 課』白水社。
㉒	<u>石井加代子</u> （編集）、 <u>稲葉美由紀</u> 、他（分担執筆）『国際社会学入門』、ナカニシヤ出版。
H29 年度：13 点	
①	<u>中村芳久</u> 教授退職記念論文集刊行会（編）、 <u>大津隆広</u> 、他（分担執筆）『ことばのバースペクティブ』、開拓社
②	<u>松村 瑞子</u> （単著）『日本語のポライトネス—異文化理解教育の方法開発に向けて—』、花書院。
③	<u>松村瑞子</u> 、 <u>单艾婷</u> （共編）「日本語会話談話資料および文法語彙資料」、九州大学大学院地球社会統合科学府。

④	Stephen Laker、他（共編） <i>Frisian through the Ages: Festschrift for Rolf H. Bremmer Jr.</i> , Leiden/Boston.
⑤	鈴木亮子、秦かおり、横森大輔（共編）『話しことばへのアプローチ：創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』、ひつじ書房。
⑥	史大観（編）、秋吉收、他（分担執筆）『徐玉諾研究叢書 徐玉諾詩文選讀』、河南：徐玉諾学会。
⑦	史大観・徐西蘭（編）、秋吉收、他（分担執筆）『徐玉諾研究叢書 將來之花園』河南：徐玉諾学会。
⑧	大野寿子（編）、谷口秀子、他（分担執筆）『グリム童話と表象文化—モチーフ・ジェンダー・ステレオタイプ—』、勉誠出版。
⑨	早瀬博範（編）、高橋勤、岡本太助、下條恵子、他（分担執筆）『21世紀から見るアメリカ文学史—アメリカニズムの変容（改訂版）』、英宝社。
⑩	浅岡善治、中嶋毅（責任編集）、佐藤正則、他（分担執筆）『ロシア革命とソ連の世紀 第4巻 人間と文化の革新』、岩波書店。
⑪	加藤晴久、倉方健作（編訳）、ピエール・ブルデュー著、『知の総合をめざして 歴史学者シャルル・エとの対話』、藤原書店。
⑫	北村 卓（監修）、足立和彦、倉方 健作、林千宏（著）『フランスを読み解く鍵 第3巻』、アシェット・ジャポン。
⑬	貴志雅之（編集）、岡本太助、他（分担執筆）『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』、金星堂。
H30 年度：7 点	
①	松村 瑞子、単艾婷（共編）『平成30年度日本語資料集』、サガプリンティング。
②	平本毅、横森大輔、増田将伸、戸江哲理、城綾実（編）『会話分析の広がり』、ひつじ書房。
③	中里見敬（編著）、『『春水』手稿と日中の文学交流—周作人、謝冰心、濱一衛』、花書院。
④	李林榮、曹衛東（主編）、秋吉收、他（分担執筆）『当代文芸評論視域中的魯迅伝統』、[北京]人民文学出版社。
⑤	Gabrielle Decamous（単著）、 <i>Invisible Colors: The Arts of the Atomic Age</i> , MIT Press.
⑥	小谷耕二（編集）、岡本太助、高橋勤、他（各分担執筆）『ホームランドの政治学—アメリカ文学における帰属と越境』、開文社出版。
⑦	川島重成、古澤ゆう子、小林薫（編）、浜本裕美、他（分担執筆）『ホメロス『イリアス』への招待』、ピナケス出版。
R01 年度：11 点	
①	孫郁（主編）、秋吉 收、他（分担執筆）『魯迅在伝統与世界之間』、[北京]人民日報出版社。
②	ブラシャント・パルデシ、他（編） 李相穆、他（分担執筆）『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』、開拓社。
③	伊藤 薫（単著）『修辞と文脈 レトリック理解のメカニズム』、京都大学学術出版会。
④	加藤重広、澤田 淳（編）内田 諭（14章執筆）『はじめての語用論：基礎から応用まで』、研究社。
⑤	ポール・ヴェルレーヌ（著）、倉方健作（訳）、『呪われた詩人たち』、幻戯書房。
⑥	倉方秀憲（編集主幹）、東郷雄二、春木仁孝、大木充、倉方健作（編集委員）『プチ・ロワイヤル仏和辞典 第5版 小型版』、旺文社。
⑦	倉方秀憲（編集主幹）、東郷雄二、春木仁孝、大木充、倉方健作（編集委員）『プチ・ロワイヤル仏和辞典 第5版』、旺文社。
⑧	高橋 勤、小谷耕二、高野泰志、喜納育江、岡本太助、竹内勝徳、牧野理恵、小谷耕二（編）『ホームランドの政治学—アメリカ文学における帰属と越境』、開文社。
⑨	土屋智行（単著）『言語と慣習性：ことわざ・慣用表現とその拡張用法の実態』、ひつじ書房。
⑩	山村ひろみ（単著）『解説が詳しいスペイン語の作文[改訂版]』白水社。
⑪	米倉 よう子、山本 修、浅井 良策（編）劉 巖（著）『ことばから心へ—認知の深淵』、開拓社。
R02 年度：13 点	
①	Jonathan ALELES、Narahiko INOUE『An Introductory Guide to Debating in English (Second Edition)』、花書院。
②	投野由紀夫、根岸雅史（編）内田諭、他（共著）『教材・テスト作成のための CEFR-J リソースブック』、大修館書店。
③	九州大学共創学部ワードクエスト編集委員会：内田 諭、稲垣紫緒（監修）『ワードクエスト：世界とつながる上級英単』、九州大学出版会。

④	G. Axtell and A Bernal (eds) Shaun O'Dwyer 『Epistemic Paternalism: Conceptions, Justifications and Implications』 London: Rowman and Littlefield.
⑤	倉方健作 (単著) 『ミニマルフランス語文法 Venez nombreux!』, 朝日出版社.
⑥	ミシエル・ビュートル (著) 石橋正孝監訳 (荒原邦博、上杉誠、塩谷祐人、倉方健作、三枝大修、鈴木創士、新島進、福田桃子、三ツ堀広一郎訳) 『レペルトワール I』, 幻戯書房.
⑦	久保田賢一 (編著) 鈴木隆子、他 『途上国の学びを拓く-対話で生み出す教育開発の可能性』、明石書店.
⑧	辻野裕紀、大津隆広、田中俊也 (編) 『連続講義「ことばの科学」2016-2018』(言語文化叢書 X X III), 九州大学大学院言語文化研究院.
⑨	中里見敬、松浦恆雄 (編)、大野陽介、加藤徹、谷曙光、菅原慶乃、鈴木直子、田村容子、中塚亮、長嶺亮子、西村正男、波多野真矢、平林宣和、藤野真子、三須祐介、森平崇文 (執筆) 『演文庫戯単図録: 中国芝居番付コレクション』、花書院.
⑩	中里見敬 (編)、傅謹、王旭、谷曙光、李莉薇、汪詩珮、吳宛怡、蔡欣欣、松浦恆雄、藤野真子、森平崇文、太田一昭、久堀裕朗、中塚亮、中里見敬、波多野真矢、鈴木直子 (執筆)、松浦恆雄、中塚亮、中里見敬、田村容子、大野陽介 (翻訳) 『中国戯単の世界: 「戯単、劇場と 20 世紀前半の東アジア演劇」学術シンポジウム論文集』, 花書院.
⑪	浜本裕美、河島思朗 (編) 逸身喜一郎、古澤香乃、上野由貴、小池登、日向太郎、大芝芳弘、佐野好則、栗原裕次、金子善彦、金澤修、宮原優、吉田俊一郎 『西洋古典学のアプローチ-大芝芳弘先生退職記念論集-』、晃洋書房.
⑫	Rafael García López/Yuko Morimoto (eds.) Hiromi Yamamura 他 (掲載論文) 『DE LA ORACION AL DISCURSO Estudios en español y estudios contrastivos』, Peter Lang.
⑬	福元圭太 (単著) 『賦霊の自然哲学 フェヒナー、ヘッケル、ドリーシュ』、九州大学出版会.
R03 年度: 5 点	
①	高橋 勤 (単著) 『野生の文法 (グラマー) ——ソロー、ミューア、スナイダー』、九州大学出版会.
②	辻野裕紀 (単著) 『形と形が出合うとき』、九州大学出版会.
③	Shaun O'Dwyer (編) 『Handbook of Confucianism in Modern Japan』, Japan Documents & Amsterdam University Press.
④	山梨正明 (編)、朱冰・堀江薫、他 (分担執筆) 『認知言語学論考 No.15』 ひつじ書房.
⑤	米倉よう子 (編)、朱冰・堀江薫、他 (共著) 『意味論・語用論と他の分野とのインターフェイス』 開拓社.

論文の発表件数は表 6 の通りである。本来であれば堅調と自己分析するところであるが、最後の年については、やはりコロナ禍の影響によって教育業務に時間が取られたことが影響していると言わざるを得ない。

<表 6> 発表された論文数

論文等の種類		H28 年度	H29 年度	H30 年度	R01 年度	R02 年度	R03 年度
招待論文数	外国語	3	3	0	0	1	0
	日本語	2	5	2	0	0	1
査読付論文数	外国語	12	19	10	11	8	17
	日本語	15	12	10	10	3	4
査読無論文数		23	24	22	40	33	31
合計		55	63	44	61	45	53

学会発表についての件数は表 7 の通りである。これについても堅調以上と自己分析したいところであるが、最後の 2 年については、やはりコロナ禍の影響によって教育業務に時間

が取られたことが影響していると言わざるを得ない。

<表7>学会発表数

	H28年度	H29年度	H30年度	R01年度	R02年度	R03年度
学会発表数	62	66	88	73	27	39

・顕著な成果

第3期中期計画全体を通して研究の活性化がひとつの目的となっていたのだが、その成果として顕著な業績があがってきている。表8に示すように、九州大学での、中国を代表する作家の手稿の発見を機とする国際シンポジウムの開催とその論文集の刊行、著名な国際誌における論文の採択、また研究成果の本学での語学教育への応用、さらに名誉教授による地道に作成したテキスト・データベースの公開など、本研究院における言語学・文学にとどまらない研究領域の広さを反映して、非常に多岐にわたる、数多くの成果が報告されてきている。

<表8>期間中の顕著な研究成果

氏名	研究名	概要
		業績
秋吉收	魯迅の代表作 ・散文詩集 『野草』 の研究	<p>散文詩集『野草』は中国近代文学史上最高の文学者たる魯迅の最高傑作として称えられてきた。その「偉大」な作家魯迅の創作が実は「模倣」に支えられていたという意外な事実を、本書は明らかにした。その模倣対象は、芥川や漱石、与謝野晶子や佐藤春夫などの日本作家が中心であった。魯迅を戴く中国の研究界からはまず生まれ得なかった斬新なる成果として、内外から高い評価を得ている。</p> <p>本書は九州大学出版会の年度刊行助成に採択されると共に、書評が多数著名専門誌に掲載された。陳朝輝（名古屋大）2017年9月『現代中国』第91号／平田昌司（京都大）2017年10月『日本中国学会報』第69集／小山三郎（杏林大）2017年2月11日『図書新聞』／吉田富夫（佛教大）2017年5月5日『東方』435号などがある。日本に留まらず中国でも、北京大の辺明江2017年6月11日『論文衡史』や、趙京華（中国魯迅学会副理事長）2017年11月『『野草』出版90周年国際学術論文集』等多くの反響があり、また著者は、2017年9月に南京大主催『“伝承與変革”：記念中国新詩誕生百年国際会議』、2017年11月に復旦大中文系主催『紀念《野草》出版90周年国際学術研討会』という最高水準の国際学会に招待されて発表を行った。また、アメリカの主要アジア研究誌『Journal of East-West Thought』3(7) (IAES) USA (2017年9月)にも「Akiyoshi Shu's Lu Xun: Wild Grass and Weed」と題する長文の紹介が掲載され、その影響は欧米の研究界にも波及している。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> ・秋吉收『魯迅—野草と雑草—』九州大学出版会、全398頁、2016年 ・秋吉收「印度詩人泰戈爾與魯迅的時代」中国魯迅研究会・湖南大学文学院主催「魯迅與五四新文化—紀念五四運動一百周年国際学術研討会並びに2019年中国魯迅研究会年会」（湖南大学にて開催）、2019年 ・秋吉收「交差する日本現代文学と中国文学—魯迅研究の視点から」中国日語教学研究学会2019年度学術大会並びに日本学研究国際研討会（杭州師範大学にて開催）、2019年
G. Decamous	原子力時代における芸術の研究	<p>放射能の働きは目に見えないが、芸術はそれを可視化し、その影響を明らかにする。原子力時代のさまざまな出来事に対応するものとして生み出された芸術作品は、さまざまな見方が可能である。著書においては、マリー・キュリーに始まり、広島・長崎への原爆投下、冷戦下の太平洋における原爆実験、ウラン鉱のグローバル・マーケット、チェルノブイリ、そして福島事故に至る原子力時代を、芸術のパースペクティヴから捉えて論じた。</p> <p>【学術的意義】著書はハイレベルな学術書の出版元として知られるMIT Pressから、厳密な査読を経て出版されたことが特筆される。原子力時代と芸術作品の双</p>

		<p>方に新たな視点をもたらした著書は、アメリカ図書協会 (ALA) の一組織である大学・研究図書館協会 (ACRL) の機関紙 CHOICE にも取り上げられた。精緻な論旨は研究界が認めるところとなり、著書の延長となる 2 本の論文がカリフォルニア大学ならびにマサチューセッツ工科大学の学術誌に掲載されている (後者は 1 年間オンラインジャーナルに掲載されたのち紙媒体に再掲される予定である)。</p> <p>【社会・経済・文化的意義】著書を目にした神谷幸江 (広島市現代美術館チーフ・キュレーター) からの招待により、日本現代アートサミット 2019 (文化庁主催、2019 年 3 月 19-21 日) に参加、他の参加者と有意義なディスカッションをおこなった点が挙げられる。また、複数のインターネットサイトが著書を好意的に紹介し、なかでも定評のある美術批評ブログ「We Make Money Not Art」での 2019 年 3 月 22 日付書評、また有力なオンラインアートマガジン「Hyperallergic」に 2019 年 9 月 13 日に掲載された書評は、学術的意義に留まらない、実作者や批評家に対するインパクトの広がりを見せている。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Gabrielle Decamous, <i>Invisible Colors: The Arts of the Atomic Age</i>, MIT Press, 全 480 頁, 2019 • Gabrielle Decamous, ““Insignificant” Lives and the Power of the Arts after Fukushima,” <i>Afterimage : The Journal of Media Arts and Cultural Criticism</i>, vol.46, no.3, University of California Press, pp. 15-24, 2019 • Gabrielle Decamous, "Art, Censorship and Nuclear Warfare," <i>LEONARDO: Art, Science and Technology</i>, MIT Press, Posted Online February 13, 2020, pp.1-8, • Gabrielle Decamous, “La pluire radioactive,” <i>Op. cit. - Revue des Littératures et des Arts</i>, special edition “<i>Origami, le pli dans les littératures et les arts</i>,” June 2021 (Spring edition, number 22), online.
劉 轟	中国語の動詞接辞“了 1”と文末助詞“了 2”の指導順序に関する研究	<p>動詞接辞“了 1”と文末助詞“了 2”の習得に関する従来の研究では指導順序の観点からのアプローチは見られない。そこで、本研究では文法習得難易度の異なる“了 1”と“了 2”の指導順序を大学の授業で変えることで、習得にどのような影響を与えるか調べた。その結果、受容的知識に関しては、指導順序を変えても習得には大きな影響が見られなかった一方、産出的知識に関しては、後に教えられた“了”の方が、習得が高まる結果が示唆された。</p> <p><i>Studies in Language Sciences: Journal of the Japanese Society for Language Sciences</i> は言語学、第二言語習得研究の分野で定評のある査読誌である。第三者である査読者からは、外国語教育において同じ形式が複数の意味・機能を持つ文法項目がある場合にどちらの意味・機能から教えたほうが効果的なのかという点を実証的に調べた研究は非常にまれであるとの高い評価を受けた。本研究が調査した、中国語文法教育における最重要の課題の一つである動詞接辞“了 1”と文末助詞“了 2”の効果的な指導順序については、国内外において類似の研究がなく、第二言語習得研究の進展に大きく貢献するものである。学習効果を高める指導順序の研究は、大学におけるカリキュラムを考える上でも非常に重要であり、中国語教育のみならず外国語教育全体への高い波及効果が期待できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 許挺傑, 鈴木祐一, 劉 轟, 「文法指導の順序に関する実証的研究—中国語の動詞接辞“了 1”と文末助詞“了 2”に焦点を当てて—」, <i>Studies in Language Sciences: Journal of the Japanese Society for Language Sciences</i>, vol. 16 & 17, pp. 117-140, 言語科学会, 2018 年
中里見敬	『春水』手稿と日中の文学交流の研究	<p>2017 年に九州大学附属図書館で現代中国を代表する作家・謝冰心の『春水』手稿が発見された。2018 年 2 月には国内外の研究者を結集して、『春水』手稿をテーマとしたシンポジウムを開催した。本書はシンポジウム発表の中から特に重要な 13 本の論文を収録したもので、日中の近代における人的交流の歴史および文学観・文献の相互交流について多くの新たな知見を得るに至った。</p> <p>【学術的意義】『春水』手稿発見をめぐって、中国の学術雑誌『中国現代文学研究叢刊』、『愛心』などに取り上げられ、関連する研究成果が発表された。日本国内では『國學院雑誌』に書評が掲載された。これを機に、中国の冰心文学館および華東師範大学と共同研究、学术交流が進んでいる。『春水』手稿は中国現代文学における新資料として、今後の研究の発展に寄与することは間違いない。</p> <p>【社会、経済、文化的意義】手稿発見の公表直後に、『人民日報』2017 年 6 月 20 日をはじめ中国・台湾のメディアで大きく報道された。また 2017 年 6 月 27 日には、中華人民共和国駐福岡総領事館の何振良総領事一行が九大図書館で『春水』手稿を閲覧された。日本国内でも新聞各社が報道したほか、NHK テレビが手稿発見時 (2017 年 6 月 20 日) とシンポジウム (2018 年 2 月 7 日) 開催の 2 回ニュースとして報道し、とくに後者は特集ニュースとして歴史的背景まで踏み込んだ報道を行った。九州大学附属図書館における貴重資料の発見という点でも、大きな社会的・文化的意義を有する発見であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 中里見敬 (編著) 『春水』手稿と日中の文学交流——周作人、謝冰心、濱一衛, 花書院, 全 255 頁, 2019 年
大津	関連性理論の枠組みにお	本研究は認知語用論の理論である関連性理論 (Relevance Theory) の枠組みにおいて、日英語の談話標識やフィラー、およびその多重生起を分析したものである。

隆広	<p>る日英語の談話標識研究</p>	<p>本研究により、従来の談話分析では多義的と考えられていた談話標識の意味を、概念／手続きという意味の区別により一義的に定義することができる。多重生起の場合は、手続きが、意味解釈、調整という異なる手続きの順番に組み合わせられると結論づけられた。</p> <p><i>Journal of Pragmatics</i> と <i>Pragmatics & Cognition</i> は語用論の著名な国際学術誌である。前者の IF は 1.329 (2018/2019 年) であり、“… the paper manages to offer a fresh account of what is already a much studied discourse connective.” という査読結果を得た。後者の 5 年 IF は 0.659 である。研究の一部は第 4 回国際アメリカ語用論学会と第 16 回国際語用論学会にて発表を行った。その波及効果として、日本英文学会大会準備委員会より第 92 回大会(2020 年 5 月 16-17 日開催)にてシンポジウムの企画依頼を受け、内田聖二先生(奈良大学)、東森勲先生(大阪経済法科大学)、盛田有希先生(奈良女子大学)を登壇者に招き、4 名で「関連性理論の射程」というテーマでシンポジウムを行なうことが決まった。これらは関連性理論に基づく談話標識研究が国内的かつ国際的に評価されたことを示すものであると言える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Takahiro Otsu, “Multifunctionality of ‘after all’: A unitary account,” <i>Journal of Pragmatics</i>, vol. 134, pp. 102-112, 2018 ・ Takahiro Otsu, “From justification to modulation: Similarities and differences of <i>after all</i> and <i>datte</i>,” <i>Pragmatics & Cognition</i>, vol. 25, no.2, pp. 337–362, 2019 ・ 隆広, 第 3 章「対話における談話標識」, シリーズ<言語表現とコミュニケーション>第 2 巻『対話表現はなぜ必要なのか—最新の理論で考える』(東森勲 編) 朝倉書店, pp. 64-93, 2017 年
田中俊也	<p>印欧語比較言語学の枠組みでの、ゲルマン祖語の動詞形態の歴史的発達に関する研究</p>	<p>古ゲルマン語に共通する動詞の形態的特徴について、その発達過程が長年の研究を通じて十分に説明されていない現象を取り上げ、「形態的混交説」という新たな仮説からの説明を試みている。特に、動詞形態にゼロ階梯母音を反映する語形が生じる場合と、延長階梯母音を反映する語形が生じる場合の違いに関して、首尾一貫した説明を試みている。</p> <p>日本言語学会の機関誌である『言語研究』は、査読が厳格であり、我が国の言語学研究誌の最高峰であると言って差し支えない。『言語研究』編集委員会によれば、2017 年度の採択論文は 8 編で、採択率が 30% という狭き門を通過している。(ちなみに、2016 年度は 11 編採択、採択率が 22%、2015 年度も 11 編採択、採択率が 22% である。) 尚、『言語研究』に掲載された論文について、審査の過程において、査読者のうちの 1 名から、研究史の十分な把握に立脚した論述と独自性に富む「形態的混交説」の長所がよく理解できるという趣旨の評価を得た。この論文の PDF は J-STAGE でも収録されており、広く公開されている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 田中俊也, 「ゲルマン語強変化動詞および過去現在動詞 IV, V 類に見られる形態的差異について: Schumacher (2005) 論考の批判的考察と形態的混交説からの提案」, 『言語研究』 vol. 152, pp. 89-116, 日本言語学会, 2018
葛原亮	<p>スペイン語と英語コロケーションの対照研究</p>	<p>本研究はスペイン語の頻出動詞コロケーションを英語との対照という観点から扱う教材の作成を最終目的とする。スペイン語最頻出動詞 500 を、対応する英語動詞の使用の実際と比較・対照し、動詞間の類似点と差異を記述し得られた知見を教材に落とし込むというサイクルで研究を進めている。用途が複雑な動詞については重点的に言語学的な分析を行い、分析の成果を論文にまとめ、発表している。</p> <p>本研究ではこれまでに最頻出のスペイン語動詞 500 のコロケーションについて、それらが英語のどのような表現に対応するのかを明らかにした。その過程で多大な知見、データが得られ、その中でも特に学術的に重要と思われるものについては本研究を開始した 2017 年から現在に至るまでに 7 本の査読付き論文、11 度の学会における発表で報告している。2019 年 3 月に香港大学で開催された学会 (VII Jornadas de Formación de Profesores en Hong Kong) では、関心を同じくするスペインの Extremadura 大学の研究者らと意見交換を行い、研究上の提携を結び、今後さらなる多角的な展開が見込まれる。調査の成果は教材としてまとめており、本学における授業にも既に導入している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Ryo Tsutahara, “Las colocaciones “verbo de apoyo + nombre eventivo”: un estudio comparativo español-inglés,” <i>Hispanica</i> vol. 62, pp. 27-51, 日本イスペインヤ学会, 2018 ・ Ryo Tsutahara, “Una clase sobre los usos de los verbos habituales basada en un índice marcador de la dificultad de aprendizaje,” <i>Revista de Foro de profesores de E/LE</i>, vol.14, pp. 365-374, 2018 ・ Ryo Tsutahara, “Medir la dificultad léxica de verbos transitivos Los casos de poner, tomar, llevar, dar y sacar,” <i>Hispanica</i> vol. 63, pp. 45-70, 日本イスペインヤ学会, 2019 ・ Un estudio comparativo de <i>ir</i> y <i>go</i> como verbos semicopulativos. <i>Hispanica</i>, 64, pp. 51-77, 2021 ・ Sobre el verbo de apoyo <i>echar</i>. <i>Studia Romanica</i>, 53, pp. 1-10, 2021

劉 轟	中国語発音教育における知覚訓練の効果について	<p>中国語教育における問題点の解決を図り、学習効果を高められる知覚教材を提供するために行われた。本教材の利用により、二音節声調の前音節と後音節、舌面音、そり舌音、舌歯音など、相対的に難易度の高い項目において学習効果が促進された。また、本論文では教材の改良に向けた提言、教育現場への応用方法および注意点も提示された。なお、中国語教育に携わっているより多くの方に利用してもらえよう、2021年5月の九州中国学会第69回大会で発表した際に改善された本教材の最新版を公開した。</p> <p>・劉轟「中国語発音教育における知覚訓練の効果について—声調、母音、子音を中心に」『中国語教育』(中国語教育学会)第19号, pp. 15-35, 2021年3月(査読付)</p>
J. Vitta	An Active Participant in the Applied Linguistics and Second Language Acquisition Research Synthesis Arena	<p>Since the beginning of the 2021 academic year, I have made significant academic contributions in three ways. First is academic publishing and I have published three reports (lead/corresponding author for each) in respected international academic journals where each was a research synthesis. In the <i>Journal of Asia TEFL</i> (Scopus- and Web of Science[ESCI]-indexed), I published “Measurement and Sampling Recommendations for L2 Flipped Learning Experiments: A Bottom-Up Methodological Synthesis” (Vitta & Al-Hoorie, 2021) which was a review of the sampling and measurement procedures of 56 experimental L2 flipped classroom research designs’. This paper involved collaboration with Dr. Ali H. Al-Hoorie, a respected Saudi academic. The next paper is a methodological synthesis in press with <i>Studies in Second Language Acquisition</i> (Cambridge University Press; Scopus- and Web of Science[SSCI]-indexed; 2020 JIF = 3.406). This report (Vitta, Nicklin, & McLean, in press), entitled “Effect Size-Driven Sample Size Planning, Randomization, and Multi-Site Use in L2 Instructed Vocabulary Acquisition Experimental Samples,” reviewed the sampling procedures of experimental L2 vocabulary designs in prominent journals and made recommendations for improving future research. The final paper is an in press review, entitled “The Functions and Features of ELT Textbooks and Textbook Analysis: A Concise Review” (Vitta, in press), accepted by <i>RELC Journal</i> (Scopus- and Web of Science[SSCI]-indexed; 2020 JIF = 1.596). The second strand of academic contribution is external collaboration with Asia University and I have worked with their English department to enhance their professional development program (Vitta, 2021). The final way I have made academic contributions to the international community is via peer review. I have served as an external reviewer for international journals indexed in the Web of Science’s Core indexes such <i>Language Learning and Technology</i> (ISSN: 1094-3501), <i>Learning and Individual Differences</i> (ISSN: 1041-6080), and <i>RELC Journal</i> (ISSN: 0033-6882).</p> <p>・ Vitta, J.P. (May 2021). <i>Publishing as a Full-time Language Teacher: A Workshop</i>. Invited Workshop presented to Asia University’s Professional Development Committee (Tokyo, Japan + online).</p> <p>・ Vitta, J. P., & Al-Hoorie, A. H. (2021). Measurement and sampling recommendations for L2 flipped learning experiments: A bottom-up methodological synthesis. <i>The Journal of Asia TEFL</i>, 18(2), 682–692. https://doi.org/10.18823/asiatefl.2021.18.2.23.682.</p> <p>・ Vitta, J. P. (2021). The functions and features of ELT textbooks and Textbook analysis: A concise review. <i>RELC Journal</i>, Advance Online Publication. https://doi.org/10.1177/00336882211035826</p> <p>・ Vitta, J. P., Nicklin, C., & McLean, S. (2021). Effect size-driven sample-size planning, randomization, and multisite use in L2 instructed vocabulary acquisition experimental samples. <i>Studies in Second Language Acquisition</i>, 1–25. https://doi.org/10.1017/s0272263121000541</p> <p>・ Stewart, J., Vitta, J. P., Nicklin, C., McLean, S., Pinchbeck, G. G., & Kramer, B. (2021). The relationship between word difficulty and frequency: A response to Hashimoto (2021). <i>Language Assessment Quarterly</i>, 1–12. https://doi.org/10.1080/15434303.2021.1992629 (2020 JIF = 1.667)</p> <p>・ Nicklin, C., & Vitta, J. P. (in press). Assessing Rasch measurement estimation methods across R packages with Yes/No vocabulary test data. <i>Language Testing</i>. (2020 JIF = 3.551)</p>
福元圭太	賦霊の自然哲学 フェヒナー、ヘッケル、ドリーシュ	<p>フェヒナー、ヘッケル、ドリーシュ、この3人の実証主義的自然科学者がネオ・ロマン主義的自然哲学者へ変貌する消息を追い、自然科学における世界の数量的把握に抗し、世界の質を問う自然哲学の復活を論じた。書評紙「図書新聞」(2021年3月6日, 3486号)で神戸大学教授・松田毅は本書を「『霊魂』の探求をめぐる思想史の力作」と評価した。今秋以降も独文の全国学会誌ならびに西日本学会誌で書評が掲載されることが決まっている。</p> <p>・福元圭太『賦霊の自然哲学 フェヒナー、ヘッケル、ドリーシュ』九州大学</p>

		出版会、全 473 頁+人名索引・文献表 40 頁、計 513 頁、2020 年 10 月。
S. O'Dwyer	Confucianism's Prospects: a Reassessment,	On September 12th 2020, a webinar book panel was hosted at the Center for East Asian and Comparative Philosophy, City University of Hong Kong on my book <i>Confucianism's Prospects: a Reassessment</i> (State University of New York Press, 2019). The commentators on my book included a number of prestigious scholars in East Asian philosophy and political theory studies, including Sungmoon Kim, associate director of the Center for East Asian and Comparative Philosophy at City University of Hong Kong, and Baogang He, professor and Chair in International Relations at Deakin University. The panel commentaries and my response to them will be published in a forthcoming issue of <i>Comparative Political Theory</i> journal (Brill) this year.
		・Shaun O'Dwyer, <i>Confucianism's Prospects: a Reassessment</i> , State University of New York Press, 2019.
樋口忠治 名誉教授	Higuchi GM Corpus	2016 年度に研究資料として Higuchi GM Corpus (ゲーテとトーマス・マンのテキスト・データベース) を部局 HP に移設して改めて公開した。このテキスト・データベースに収められたファイルは、本学名誉教授の樋口忠治先生が、独力で、しかも「キーボードによる手入力」という地道な作業によって完成させたものである。以来、2021 年 7 月 3 日現在でアクセス数 13,204 回に及び、特にドイツからのアクセスが多い。
		Higuchi GM Corpus (http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~hgmc/)
内田諭 他	Survey on frontiers of language and robotics	言語とロボット工学の研究の進展および課題について、最新の動向をまとめたものである。自然言語処理の分野は機械学習の興隆によって大きな進歩を遂げたが、特にロボット工学への応用や解決すべき問題等について、体系的に論じられることはなかった。そこで本研究では、推論、教師なし統語解析、カテゴリーと概念形成、メタファー、アフォーダンス、語用論的・社会言語学的側面、シミュレーションなど、さまざまな観点からロボット工学における関連研究をまとめ、これまでの成果や直面する課題を示した。各セクションの末尾には、取り組むべき課題を整理してリスト化し、今後の研究の方向性を示唆するものとなっている。
		・T. Taniguchi, D. Mochihashi, T. Nagai, S. Uchida, N. Inoue, I. Kobayashi, T. Nakamura, Y. Hagiwara, N. Iwahashi & T. Inamura (2019) Survey on frontiers of language and robotics, <i>Advanced Robotics</i> , 33:15-16, 700-730, DOI: 10.1080/01691864.2019.1632223

・他機関や民間との共同研究・異分野共同研究

中期計画 4 には「外部資金（科研費、海外研究者招聘制度助成金など）を確保し、国内、国外から一定期間、研究者を招聘し、講座、部門、言文全体を単位とした専門的研究交流、また異なる分野の研究交流を行う」、中期計画 5 には「領域横断的共同研究を創出し、研究拠点を形成する。拠点形成にあたっては、他研究機関、海外の大学等に所属する研究者との共同研究を積極的に推進する。」、中期計画 8 には「上海外国語大学、北京外国語大学、イルクーツク国立大学等と積極的に研究者の交流を行い」とある。

期間中の民間との共同研究は、人文系という研究の性格上、表 9 が示すように、決して多いとは言えない。それでも、言語処理や議論に関するシステムの開発を民間企業と共同で行っている教員がおり、多数の海外・国内の他大学や民間研究者と連携した共同研究を継続的に行っている中国語関連の研究者がいることは特筆に値する。

<表 9> 期間中の他機関や民間との共同研究

氏名	研究名	概要
内田諭	シーマン人工知能研究所との「会話型 AI のための新口語文法体系」をめざした研究	「メロディー言語および自動発話システムによる言語処理エンジン開発のための日本語文法の再定義と体系化」という題目でシーマン人工知能研究所と共同研究を行った。この研究では、対話エンジンのための日本語文法体系について整理し、自然な対話を行うための辞書等のデータを整備し

	(2018~2020 年度)	た。
	科研費基盤研究 B「大規模コーパスに基づく発信型和英連語辞書の構築に向けて」(代表)(2018-2021 年度)	本研究は、発信型の和英連語辞書の基盤を構築することを目的としたものである。従来の和英辞書は「単語」を基礎単位として編纂されるが、本研究では「連語」を基礎単位とし、フレーズベースの日本語および英語表現を中心に辞書の基盤を構築する。具体的には、各種大規模日本語コーパスを用いて、見出し語の格(ガ格、ヲ格、ニ格など)ごとの連語を頻度順に収集し、これらを英語化する作業を他大学の研究者と連携しながら進めている。
井上奈良彦	「オンライン上での説得に関する自動検知 AI の開発」(2021 年度~)	オンライン上(Twitter)での特定のブランド・人物・概念等について、説得(他者による意見の変化)を自動検知し、分類する AI の開発を九州大学井上研究室と DataStrategy 株式会社との共同研究として行う。井上研究室がオンライン上のインタラクションに対するラベリング、オンライン上の説得に用いられている議論法の分類を行うための基礎研究を行っている。
	科研費基盤研究(B)「演文庫所蔵戯単・レコードのデータベース化と保存法の改善」(代表)(2016 年度~2020 年度)	中国人民大、中国芸術研究院戯曲研究所、中国戯曲学院戯曲研究所、国立政治大、国立台湾大、香港理工大、華南師範大、首都師範大、大阪市立大、明治大、関西大、立教大、北海道大、愛知淑徳大、沖縄県立芸術大、関西学院大、慶應義塾大、早稲田大、立命館大と共同。九州大学附属図書館演文庫に所蔵される約 200 点の戯単(芝居番付)を対象として、国内外の専門家による共同研究を行った。国際シンポジウムを開催したほか、成果として『演文庫戯単図録:中国芝居番付コレクション』、および『中国戯単の世界:「戯単、劇場と 20 世紀前半の東アジア演劇」学術シンポジウム論文集』(いずれも花書院, 2021 年)を刊行した。また中国の学術誌『戯曲研究』第 113 輯で紹介された。
中里見敬	平成 29 年度九州大学 QR プログラム<通常枠>Ⅲ.特定領域強化プロジェクト「人社系アジア研究活性化重点支援」, 代表, 新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築(代表)(2017~2018 年度)	比較社会文化研究院の東英寿、波瀾剛および中里見教授の 3 名で、QR プロジェクトの支援を受けた共同研究を行った。中国古典、日本近代文学、中国現代文学の各分野における新資料発見を契機として、文献および人的交流を明らかにし、国や地域、言語ごとに分断された各国文学の枠を超えた東アジア文化研究を提唱するとともに、中里見分だけでも次の研究者ネットワークを構築した。 氷心文学館、北京第二外国語学院、ウィーン大、中国現代文学館、華東師範大、中山大、九州大附属図書館、関西大、早稲田大、日本女子大、駒澤大、國學院大、弘前学院大、神戸大、立命館大、立教女学院短大、南山大、長崎県立大、北九州市立大、九州産業大、大分大、山口大、関西学院大
	科研費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)), 代表, 周作人宛書簡の整理・目録作成と保存状態の改善(代表)(2018~2024 年度)	清華大、ケンブリッジ大、弘前学院大、富山大、日本女子大、大阪教育大、近畿大と共同。北京の個人所蔵である周作人宛書簡のうち、とくに日本語および欧文書簡を整理し、目録を作成することを目指した共同研究である。中国を代表する文化人であった周作人宛の書簡目録が完成すれば、文学、歴史、日中交流史など他分野にまたがる人的交流が明らかになることが期待される。
秋吉收	中国河南省の民間研究者との共同による中国近代詩人徐玉諾研究(2017 年)	中国河南省魯山県出身の近代中国代表詩人徐玉諾(1894-1958)は、新体詩集『将来之花園』、『雪朝』(1922 年刊)など重要な詩集を発表し、魯迅を始めとする当時の文壇に多大な影響を及ぼした。河南省で開催された「第 1 回徐玉諾文化学術国際学会」にて招待講演を行った秋吉は、その縁で地元の民間研究者の組織になる「『徐玉諾研究叢書』学術委員会」に参加、2017 年 11 月出版の同叢書にて共同執筆者、序文執筆等に参画した。 具体的な研究成果: ・『徐玉諾研究叢書 将来之花園』(全八冊の一)、史大観・徐西蘭編、2017 年 5 月初版、河南:徐玉諾学会、『徐玉諾研究叢書』学術委員会。(秋吉收「魯迅与徐玉諾—圍繞散文詩集『野草』」pp. 218-243, 「頼和与徐玉諾—“台湾的魯迅”與大陸新文学的關係」pp. 244-274.) ・『徐玉諾研究叢書 徐玉諾詩文選讀』(全八冊の六)、史大観編、2017 年 9 月初版、同上。(秋吉收「作為“郷土文学”作家的徐玉諾」pp. 1139-1156, 「關於未刊行的『徐玉諾小説集』」pp. 1157-1170.)

さらに他機関との共同研究に関連したものとして、海外からの研究者を招いての研究交流としては、表 10 のようなものがある。やはり、九州大学における中国の著名作家の手稿発見に伴う国際シンポジウム開催や、一連のディベート関連の会議で海外から多数の研究

者が発表したことなどが特筆に値する。

<表 10> 海外の研究者を招いての研究交流

氏名	概要
松村瑞子・辻野裕紀・志水俊広	東アジア日本語・日本文化研究会（2021年9月23日からは東アジア言語文化研究会に改称）が関係海外大学と交代で東アジア言語文化フォーラムを開催している。期間中には下記の3回が本研究院側で開催されている。関係大学の教員と大学院生を中心とした研究発表や招待講演などを行っている。この活動は本研究院と九州大学大学院地球社会統合科学府と上海外国語大学日本文化経済学院との間の学術交流協定にも基づいて行われている。九州大学側では、本研究院所属で地球社会統合科学府にも所属して院生指導を実施している教員とその指導院生が中心となって参画している。日本語や中国語、および両国の文化等に関係した研究上の交流を目的としており、下記行事の成果をもとにした会誌の発行も行っている。 ・2016年度 2017年2月4日に第18回を九州大学伊都キャンパスで開催。中国上海外国語大学日本文化経済学院、韓国仁川大学校と協働。 ・2019年度 2020年2月22日に第21回を九州大学伊都キャンパスで開催。中国上海外国語大学日本文化経済学院と協働。本研究院共催。 ・2020年度 2021年3月20日に第22回を九州大学側の運営でオンライン開催。中国上海外国語大学日本文化経済学院と協働。本研究院共催。
中里見敬	2017年に本学附属図書館「濱文庫」で、中里見敬教授が中国の著名作家・冰心（1900～1999年）の詩集『春水』の手稿を発見し、中国現代文学分野における最大級の新発見として、国内外とりわけ中国で大々的に報道された。これを受けて「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」が、2017～2018年度の九州大学 QR プログラムに採択され、2018年2月6日に第1回「東アジアの交流と文学」国際シンポジウム「『春水』手稿と日中の文学交流：周作人、冰心、濱一衛」を、言語文化研究院と附属図書館の共催で開催し、80名を越す参加者を得た。その成果として同教授を編著者とし、日中の研究者15名の論文を含めた書籍が2019年3月に刊行された。 2019/08/28～2019/08/29, 2019年度 中国古典小説研究会 大会, 大会開催校代表、於九州大学 中国戯曲学院戯曲研究所, 首都師範大学から招聘。中国古典小説研究会は、日本の中国古典小説研究者の学会組織であり、年1回の大会を開催している。2019年は中里見教授が開催を担当し、2日間の日程で研究発表を行った。中国戯曲学院戯曲研究所から招聘した傅謹先生に記念講演を行っていただいたほか、首都師範大学の周文業先生も研究発表を行った。また国内研究者による発表も多数行われた。 2019/08/27～2019/08/28, 首届“戲單、劇場與二十世紀上半葉的中國演劇”學術研討會, 九州大学言語文化研究院と中国人民大学国学院の共同主催。於九州大学、中国人民大学、中国芸術研究院戯曲研究所、中国戯曲学院戯曲研究所、国立政治大学、国立台湾大学、香港理工大学、華南師範大学、首都師範大学から招聘。科研費・基盤研究(B)「濱文庫所蔵戯単・レコードのデータベース化と保存法の改善」により開催した国際シンポジウムである。中国の戯単と劇場をテーマとした世界で初めてのシンポジウムにおいて、国内外の専門家17名が研究発表を行った。あわせて展示会「中国の芝居番付〈戯単〉——戦前の日本人学者が見た中国の名優と名舞台」を開催し、一般市民向けに研究成果および貴重資料を公開した。
S. Laker	スティーブン・レイカー准教授は、2018～2019年度に English in Contact のタイトルで九州大学 Progress100 に採択され（代表）、オックスフォード大学、トロント大学、ミュンヘン大学等から研究者を招聘して2019年3月に九州大学で国際シンポジウムを開催し、言語文化研究院の国際的な連携の強化が図られた。また2018～2019年度には「わかばプロジェクト」にも採択されている（“Visualizing language change in multiple datasets using computational tools”：代表）。
井上奈良彦	井上奈良彦教授が中心となり、ディベート関連の国際研究大会が継続的に実施されている。 ・2016年度 国際研究大会（言語文化研究院共催） ディベートと議論教育第3回、2017年3月18-19日、九州大学伊都キャンパス 井上奈良彦教授を中心に関与。ディベートと議論教育に関する研究発表、実践報告。 ・2017年度 国際研究大会（言語文化研究院共催） ディベートと議論教育第4回、2018年3月、九州大学伊都キャンパス 井上奈良彦教授を中心に関与。ディベートと議論教育に関する研究発表、実践報告。 ・2018年度 国際研究大会（言語文化研究院共催） パラメンタリーディベート教育第1回、2018年8月20日、九州大学伊都キャンパス 井上奈良彦教授を中心に関与。パラメンタリーディベート教育に関する研究発表、実践報告。 ・2018年度 国際研究大会（言語文化研究院共催） ディベートと議論教育第5回、2019年3月16-17日、九州大学伊都キャンパス 井上奈良彦教授を中心に関与。ディベートと議論教育に関する研究発表、実践報告。 ・2019年度 国際研究大会（言語文化研究院共催） パラメンタリーディベート教育第2回、2019年8月12日、九州大学伊都キャンパス ・2019年度 国際研究大会（言語文化研究院共催）

	<p>ディベートと議論教育第6回(オンライン)2020年3月14-15日、九州大学伊都キャンパス・2020年度 国際研究大会(言語文化研究院共催)</p> <p>ディベートと議論教育第7回(オンライン)2021年3月13-14日、九州大学伊都キャンパス・2021年度 国際研究大会(言語文化研究院共催)</p> <p>ディベートと議論教育第8回(オンライン)2022年3月5-6日、九州大学伊都キャンパス</p>
阿尾安泰	2017年9月に、九州大学の西新プラザでルーアン大学のフランソワ・ベシール教授を招いて「寛容を目指すヴォルテールの戦い」というタイトルで講演会を行った。
鈴木隆子	2018年11月に、科研(B)「途上国農村地域における初等教育の教育成果に関する調査」の研究成果発信の一環として、九州大学伊都キャンパスにおいて、外国人研究者を招請し、国際ワークショップ“Multigrade Teaching Workshop”を開催した。この分野の専門家と成果を共有するとともに、類似研究及び国際的動向を共有し、相対的な知の構築を目指した。

続いて、人文系と理系の研究分野は、研究内容だけでなく、アプローチの仕方も根本的に異なることが多く、それらを統合・融合した研究を行うことは本来難しいものである。しかし、それに果敢に挑戦した数名の教員がいて、表11の通り、九州大学で企画されたつばさプロジェクトなど計7件の研究に関わっており、しかも立派な成果を挙げていることが注目される。

<表11>異分野共同研究

氏名	研究名	概要
下條恵子	九州大学「QRプログラムつばさプロジェクト」(代表) 「文学から見るリスクマネジメント」(2015~2016年度)	<p>本プロジェクトの概要:文学・政治学・言語学という文系研究と数学という理系研究の文理融合型研究プロジェクトの研究モデルを構築し、文学研究(テキスト解釈)に、数学(数値分析)、政治学(社会政策分析)、言語学(言語データ分析)を加えた学際的視点から、近代英米文学におけるリスク言説の形成と変容を領域横断的に明らかにすることを目標とするものであった。プロジェクトの構成員は、下條恵子(研究代表者:言語文化研究院・准教授)、内田諭(言語文化研究院・准教授)、斎藤新悟(基幹教育院・准教授)、渡邊智明(グリーンアジア国際リーダー教育センター・助教)、谷口説男(基幹教育院・教授)の5名であり(所属、職階は当時)、以下のような研究成果を残すことができた:</p> <p>【口頭発表】</p> <ul style="list-style-type: none"> 下條恵子、斎藤新悟「言及性に着目した戦争小説における数理的な研究」日本アメリカ文学会東京支部例会、慶應義塾大学、2018年3月24日。(国内学会、審査なし) 内田諭、下條恵子、渡邊智明、斎藤新悟、谷口説男「Word2vecによる文学作品の時代比較:コーパスを軸とした異分野融合型研究の試み」英語コーパス学会、関西学院大学、2017年9月30日。(国内学会、審査あり) Keiko SHIMOJO and Shingo SAITO “Literature x Mathematics” ACL(x) 2016: Extra-Disciplinarity (American Comparative Literature Association, 23-24 September 2016, Pennsylvania State University, the United States of America, 24 September 2016. (国際学会、審査あり) <p>【学術論文】</p> <ul style="list-style-type: none"> UCHIDA Satoru, SHIMOJO Keiko, WATANABE Tomoaki, SAITO Shingo, and TANIGUCHI Setsuo “Vocabulary Comparison in Works of American Prose: An Interdisciplinary Analysis Using Word2vec” 『英語英文学論叢』第68集(国内誌、九州大学大学院言語文化研究院英語科)71-84頁。(2018年2月、査読なし)
	九州大学「QRプログラムつばさプロジェクト」(代表) 「英米文学における「リスク」言説の形成と変容—文学、数学、政治学、言語学による考察」(2016~2018年度)	
内田諭	九州大学「QRプログラムつばさプロジェクト」多次元型グラウンディッド・テキストマイニング(MGTM)を用	本研究は、企業が発行するCSR報告書を対象としてテキストマイニングを実施し、業種や年代による違いを明らかにしたものである。自然言語処理の技術を活用して大量のテキストを分析し、その結果を多分野からなる研究チームで考察した。異分野融合的な視

	いた「企業の社会的責任 (CSR)」の異分野融合研究 (分担), (2015~2016 年度)	点を取り入れることで、多角的な解釈が可能となった。
	九州大学「QR プログラム つばさプロジェクト」文学から見るリスクマネジメント (分担), (2015~2016 年度)	本研究は文学テキストに表れる「リスク」の概念について分析したものである。時代別に文学テキストを収集し、コーパス言語学の分析手法を用いてマクロ的な視点から文書解析を実施した。また、数学・政治学・文学等の観点からリスクという概念の解釈を試みた。
	九州大学「QR プログラム つばさプロジェクト」「クリティカルシンキング教育に有効なアクティブラーニング型教材アプリの開発・検証」(代表) (2018~2019 年度)	本研究は批判的思考力を涵養するためのアプリケーションを開発したものである。海外のテストなどを参考に、言語学・コミュニケーション学・ディベート学等の知見を用いて批判的思考力を養うための問題集を作成し、自律的学習を促進するためのアプリケーション開発のための基礎研究を実施した。
井上奈良彦	九州大学「QR プログラム つばさプロジェクト」双方向的な議論能力を測定するための議論可視化モデルの開発 (分担) (2015~2016 年度)	研究グループによるそれまでの一方向の論証モデルに「反論」を組み込んだ双方向モデルに基づく Web 版議論可視化システムの試行版を開発した。また、論証課題教材のための課題項目を検討し作成を試みた。政治学・市民教育、コミュニケーション学・議論学、教育心理学、情報科学・教材開発の分野の研究者が協力して研究を進めた。
	科研費基盤研究 B「クリティカルシンキングの向上を目的としたアクティブラーニング型アプリの開発」(代表) (2018-2020 年度 18H01055)	研究分担者に情報科学分野研究者等を含む (金子 晃介 九州大学, サイバーセキュリティセンター, 准教授) 研究成果: 【学術論文】 ・上土井宏太, 竹中野歩, 中川詩奈, & 井上奈良彦「分野横断型チームによるクリティカルシンキングアプリ開発の研究過程で得られた知見に関する考察」『言語科学』, 第 56 号, pp. 47-56.2021 年 3 月 (共著) ・JODOI Kota, TAKENAKA Nobu, UCHIDA Satoru, NAKAGAWA Shiina and INOUE Narahiko (2021) Developing an active-learning app to improve critical thinking: item selection and gamification effects. <i>HELIYON</i> , Volume7, Issue11. DOI 10.1016/j.heliyon.2021.e08256 【口頭発表】 ・竹中野歩・張小英・軸屋邦彦・上土井宏太・内田諭・井上奈良彦「特別パネル: クリティカルシンキング教育と教材アプリの開発」第 6 回東京議論学国際学術会議. オンライン. 2020 年 8 月 10 日-12 日 ・上土井宏太, 竹中野歩, 中川詩奈, & 井上奈良彦. 「クリティカルシンキング教育のための アクティブラーニング型教材アプリの開発と分野横断型プロジェクト運営に関する考察」日本コミュニケーション学会第 50 回記念年次大会. オンライン. 2021 年 6 月 13 日

また、部局全体を単位とした研究交流としては、上海外国語大学日本文化経済学院とは地球社会統合科学府と共同にて 2020 年 8 月から 5 年間で部局間学術交流協定および部局間学生交流協定を更新し、北京外国語大学日本学研究センターとは比較社会文化研究院と共同にて 2019 年 12 月から 5 年間で部局間学術交流協定を締結し、イルクーツク国立大学人文・外国語・メディアコミュニケーション研究所とは地球社会統合科学府と共同にて 2017 年 10 月から 5 年間で部局間学術交流協定を締結した。

・部局内の出版や研究会活動

本研究院では学術的な交流と発信の場として、言語学を専門とする研究者を中心とした言語研究会が存在し、会員の研究発表を行う例会を年約 6 回開催するほか、『言語科学』を 1965 年より年 1 回刊行している。また、語科の一つである英語科 (以前はそれを母体とす

る英語英文学研究会)が、1951年より年1回『英語英文学論叢』を刊行している。過去には、『独仏文学研究』(1951年～2001年)があった。また、部局の紀要としては、全構成員を対象とする『言語文化論究』(査読付き、1990年より年1回刊行、1998年より年2回)がある。これらの学術雑誌に発表される論文数は、表12の通り、年度によって若干の変動はあるものの、期間中ほぼ一定の水準で推移していると言え、構成員の着実な研究成果の発表が行われていることを示している。また、これらの研究成果の一部は現在オンラインでも公開されており、毎月約6,000回アクセス(閲覧およびダウンロード)されている。

<表12>部局内紀要類の発行状況

誌名	発行部署	出版年度	巻数	頁数	本数	
					論文	その他
言語文化論究	言語文化研究院	H28年度	37	133	7	2
		H28年度	38	126	5	3
		H29年度	39	86	4	3
		H29年度	40	135	7	1
		H30年度	41	95	3	3
		H30年度	42	81	2	4
		R01年度	43	103	4	3
		R01年度	44	113	5	3
		R02年度	45	49	1	3
		R02年度	46	77	4	1
		R03年度	47	122	3	5
言語科学	言語文化研究院言語研究会	H28年度	52	85	3	0
		H29年度	53	115	9	0
		H30年度	54	76	6	0
		R01年度	55	94	7	0
		R02年度	56	74	6	0
		R03年度	57	62	4	0
英語英文学論叢	九州大学英語英文学研究会	H28年度	67	48	3	0
		H29年度	68	118	7	0
	言語文化研究院英語科	H30年度	69	52	3	0
		R01年度	70	64	4	0
		R02年度	71	41	2	0
		R03年度	72	65	2	0

さらに、言語文化研究院では FLC 叢書、言語文化叢書を随時出版しており、第 3 期期間中に下記を出版した。

<表 13> 期間中の FLC 叢書の発行

号	書名	著者	ISBN	出版社	頁数	発行	概要
12	日本語のポライトネス—異文化理解教育の方法開発に向けて—	松村 瑞子	978-4865611274	花書院	230	2018/2/20	日本語学習者人口は増加し、これに伴って高い能力の獲得を目指す人の数が広がり、求められる中上級の技能の質も異なってきた。以前は上級に達しようとする人々の殆どは、各種文献の読解に興味の中心があった。しかし最近、広い分野の人々が、日本人と互角に渡り合って深い意思を交換するための手段として、状況に応じて敬意や親しみなど様々の感情を表現できる話し言葉の高い能力を求める傾向が強まっている。効果的な意思疎通のためには、日本語のポライトネスの特徴を正しく認識し、場面に応じて使いこなす能力が非常に重要である。このような現状を鑑み、本研究では、日本語のポライトネスを異文化理解教育の観点から論じる。
13	中国戯単の世界—「戯単、劇場と 20 世紀前半の東アジア演劇」学術シンポジウム論文集—	太田一昭 中里見敬 他計 17 名	978-4865612226	花書院	376	2021/3/18	2019 年 8 月 27、28 日に九州大学言語文化研究院と中国人民大学国学院の主催により開催された「戯単、劇場と 20 世紀前半の東アジア演劇」学術シンポジウム(正式名称は「首届“戯単、劇場與二十世紀上半葉的東亞演劇”學術研討會」)の成果をまとめた論文集である。

* 因みに 11 号までは以下のとおりである (出版社は表 13 と同じ)。

<表 14> 第 3 期以前の FLC 叢書

号	年度	研究者 (著者)	書名
1	2010	Michel, Wolfgang (単著)	<i>Der Ost-Indischen und angrenzenden Königreiche vornehmste Seltenheiten betreffende kurze Erläuterung: Neue Funde zum Leben und Werk des Leipziger Chirurgen und Handelsmanns Caspar Schamberger</i>
2	2011	Tanaka, Toshiya (単著)	<i>A Morphological Conflation Approach to the Historical Development of Preterite-Present Verbs: Old English, Proto-Germanic, and Proto-Indo-European</i>
3	2011	濱 一衛 (著訳)・中里見 敬 (編集)	『中国の戯劇・京劇選』
4	2011	古村由美子 (単著)	『成人バイリンガルの「断り」場面における対人葛藤対処方法に関する研究』
5	2011	江口 巧 (単著)	『日英語の分析—意味と形式のおりなす調和—』
6	2011	鈴木右文 (単著)	『仮想空間文字チャットによる英語対話演習授業』
7	2012	李 相穆 (単著)	『マルチメディアと外国語教育』
8	2012	鈴木隆子 (単著)	『ザンビアの複式学級—アフリカにおける万人のための教育 (EFA) 達成を目指して—』
9	2012	Inaba, Miyuki (単著)	<i>Capitalism for the Poor: Does Microenterprise Work in the Developed World?</i>
10	2014	内田 諭 (単著)	『フレーム意味論に基づいた対照の接続語の意味記述』
11	2015	中里見敬・李麗君他 (共編)	『濱文庫所蔵唱本目録』

<表 15> 期間中の言語文化叢書の発行

号	書名	著者	出版元	頁数	発行	概要
23	連続講義「ことばの科学」：2016-2018	辻野裕紀 大津隆広 田中俊也 編	言語文化 研究院	123	2020/ 10	2016年から2018年にかけて九州大学伊都キャンパスにて開講された基幹教育フロンティア科目「ことばの科学」の講義録である。

* 因みに 22 号までは以下のとおりである。

<表 16> 第 3 期以前の言語文化叢書

号	年度	研究者 (著者)	書名
1	2002	鈴木右文 (単著)	『大学英語教育の課題と対話演習授業の新展開』
2	2002	井上奈良彦・大津隆広・志水俊広・田中俊明・田中陽子・田畑義之・松田隆治 (共訳)	『ヨーロッパの学校における外国語教育』
3	2003	ヴォルフガング・ミヒエル (編著)	『ヘルマン・ブショフ：痛風に関する詳細な研究及びその確実な治療法と効き目のある薬剤について』
4	2003	棚瀬明彦 (単著)	<i>Konkordanz zu FRIEDRICH HOLDERLINS Briefen Substantive: Teil I, II</i>
5	2003	太田一昭 (単著)	『初期英国演劇統制資料』
6	2003	松原孝俊 (単著)	『韓国書誌に関する日本語情報目録』
7	2003	岩佐昌暲 (単著)	『文革新期の文学』
8	2003	山村ひろみ・小熊和郎・松村瑞子 (共著)	『テンスとアスペクトー日・英・仏・西語の観点からー』
9	2004	徳見道夫 (編著)	『社会開発学をめぐって』
10	2004	棚瀬明彦 (編著)	<i>Konkordanz zu FRIEDRICH HOLDERLINS Aufsätzen Substantive</i>
11	2004	小谷耕二・吉崎泰博 (共著)	『日本におけるアメリカ南部文学研究書誌、1994-2001』
12	2004	大津隆広 (単著)	『発話と意味解釈』
13	2004	谷口秀子 (単著)	『ジェンダーを超えるヒロインたちー子供の本における多様な女性像の提示を目指してー』
14	2005	棚瀬明彦 (単著)	<i>Konkordanz zu FRIEDRICH HOLDERLINS Übersetzungen Substantive</i>
15	2005	谷口秀子・松村瑞子・因京子・田部井世志子・岩佐昌暲・山村ひろみ・野々村淑子 (共著)	『言語と文化のジェンダー』
16	2005	井上奈良彦 (編著) 津田晶子・中野美香 (共著)	『国際化時代の大学英語教育：現状の足枷と新たな可能性』
17	2006	李一清・稲葉美由紀・大谷順子・小松太郎 (共著)	『開発と社会政策』
18	2008	ヴォルフガング・ミヒエル (単著)	『慶安三、四年の日本における出島商館医シャムベルケルの活動及び初期カスバル流外科について』
19	2009	Toshiya, TANAKA (単著)	<i>The Genesis of Preteritw-Present Verbs: the Proto-Indo-European Stative-Intransitive System and Morphological Conflation</i>
20	2010	曹美庚・李相穆 (共著)	『韓国語文学・発音学習教材の開発』
21	2010	長谷川由紀子・曹美庚・大名力 (共著)	『韓国語教材における語彙使用頻度調査研究』
22	2016	秋吉收 (編著)	『現代の日本における魯迅研究』
23	2020	辻野裕紀・大津隆広・田中俊也 (共編)	『連続講義「ことばの科学」2016-2018』

また、上記言語研究会では、表 17 のように例会を実施している。

<表 17>言語研究会例会

回・日付	発表題目
H28 年度	
166・01/19	・視点と人称詞・再帰代名詞との関わりー中国語の場合
H29 年度	
167・06/13	・ Changing trends in US academic debate: Reaching minority communities
168・03/15	・定年退職者懇話会
H30 年度	
169・06/07	・『動詞の難しさ』測定の試み
170・07/05	・『ドイツ・インターンシップ研修』の準備段階における語学教育：1年間で0からCEFRのA2水準へ
171・08/02	・日本語クラスにおける上位者と下位者の勉強感の比較：個人別態度構造分析（PAC分析）による事例研究
172・09/06	・日本語話者による中国語機能語の習得に関する研究
173・10/11	・関連性理論における談話標識
174・11/08	・魯迅『阿Q正伝』の戦後台湾における“日本語”翻訳をめぐる
175・12/20	・EMIの重要性和CLILの有効性：クイーンズランド大学での教員研修の報告
176・01/17	・International Students as teaching assistants: Internationalization in our classrooms
177・02/14	・アカデミック・ディベートとアカデミック・ライティングにおける資料利用の諸問題
178・03/07	・English <i>uncouth</i> rude, socially unacceptable
R01 年度	
179・04/04	・二次元的なものに用いる中国語類別詞について
180・05/09	・Critical Research Methods in Communication Studies
181・06/06	・韓国語音韻史の諸相：中世語を中心に
182・07/18	・Is *Heliyon*, a mega journal from Elsevier, “predatory”? と考えてみた
183・10/03	・電子ジャーナルの高騰化/ハゲタカ出版/Sci-hub/カスケード査読等最近の動向について
184・11/21	・なぜいきなり歌って踊りだすのだろうかーアメリカン・ミュージカル研究概論
185・12/05	・西・英語動詞の脱意味化be化する自動詞とdo化する他動詞
185・12/05	・九州大学におけるオーストリア政府公認ドイツ語能力検定 試験ー受験対策授業と試験成果について
186・01/16	・工学向け言語資源を用いたレジスター研究
187・02/20	・生成文法の過去と現在
R02 年度	
新型コロナウイルスの蔓延により実施せず	
R03 年度	
188・12/16	・ヒロシマ・ナガサキは誰が語り得るかーアラキ・ヤスサダ事件と文学批評

・学会活動

本研究院の教員のひとりひとりが様々な学会等に会員として所属しており、全構成員についてそれらを挙げれば表 18 のようになる。また、会員だけではなく、それぞれの学会等において、会長、副会長、理事、幹事、事務局長などの役職に就いている場合や、学会誌の編集委員や当該学会内の研究会代表などに就任している場合も数多い。また、表 18 には言及されていないが、大会の実行委員や開催校委員、機関誌や研究発表の査読委員などを務める場合も多い。これらに加え、大会での研究発表やシンポジウムのパネリスト等

は数知れずあり、これらの学会活動を通して、関連学界の発展に貢献してきている。なお、2016年度の日本歴史言語学会2016年大会は、2016年11月19-20日に九州大学西新プラザにおいて本研究院の共催行事として行われた。

<表 18>学会活動概要（大会委員、シンポジウム、研究発表、審査等は省略）

<p>【国際学会】 American Anthropological Association（会員） American Association for Applied Linguistics（会員） American Forensic Association（会員） American Pragmatics Association（会員） Asia TEFL（会員） Asociacion de Linguistica y Filologia de America Latina（会員） Children's Literature Association（会員） Comparative and International Society of Education（会員） Design Research Society（会員） Deutsche Thomas Mann Gesellschaft（会員） Grimmshausen-Gesellschaft（会員） International Cognitive Linguistics Association（会員） International Pragmatics Association（会員） International Society for Biosemiotic Studies（会員） International Society for the Linguistics of English（会員） International Society of Historical Linguistics（会員） Korea TESOL（会員） Linguistic Society of America（会員） LVC-NET（会員） National Communication Association（会員） The Alliance of Digital Humanities Organization（会員） The Philological Society（会員） 韓国日本語学会（会員、理事） 国語学会（韓国）（会員） 国際韓国語教育学会（会員） 国際日韓比較言語学会（会員） 国際魯迅学会（会員、代表理事、理事） 大韓日本文化学会（会員、理事） デイベート教育国際研究会（会員、会長）</p>
<p>【国内学会】 ASLE/Japan 文学・環境学会（会員、副会長） e-Learning 教育学会（会員、理事） アメリカ学会（会員） 岩崎研究会（会員、運営委員） 英語コーパス学会（会員、副会長、研究会代表、研究会副代表、理事、事務局長、事務局補佐） 英語語法文法学会（会員） 絵本学会（会員） 外国語教育学会（会員） 外国語教育メディア学会（会員、編集委員） 韓国・朝鮮文化研究会（会員） 韓国日本学会（会員） 韓国日本語学会（会員、理事） 関西言語学会（会員） 九州アメリカ文学会（会員、幹事） 九州英語教育学会（会員） 九州中国学会（会員、理事） 九州フランス文学会（会員、幹事） 九州法学会（会員） 言語処理学会（会員、編集委員） 国際開発学会（会員） 古典文献学研究会（会員） 社会言語科学会（会員、幹事、運営委員） 出土資料学会（会員） 全国語学教育学会 JALT (The Japan Association for Language Teaching)（会員、部会役員） 大学英語教育学会（会員、理事） 大学英語教育学会九州沖縄支部（会員、会長、副会長、編集委員、研究企画委員）</p>

中国語教育学会（会員）
 中国古典小説研究会（会員）
 中国文芸研究会（会員）
 中国文史哲研究会（会員）
 朝鮮学会（会員）
 朝鮮語教育学会（会員）
 朝鮮語研究会（会員）
 東方学会（会員、学術委員、編集委員）
 東北中国学会（会員）
 西日本生命倫理研究会（会員）
 西日本独文学会（会員）
 日英英語教育学会（会員）
 日中対照言語学会（会員、理事）
 日本アメリカ文学会（会員）
 日本アメリカ文学会九州支部（会員、会長、事務局長）
 日本医学英語教育学会（会員）
 日本イギリス児童文学会（会員、監事）
 日本イギリス児童文学会西日本支部（会員）
 日本イスマニヤ学会（会員、理事、編集委員）
 日本英語学会（会員）
 日本英文学会（会員）
 日本英文学会九州支部（会員、副支部長、評議員、理事、事務局）
 日本韓国語教育学会（会員、運営委員）
 日本言語学会（会員）
 日本現代中国学会（会員）
 日本語語源研究会（会員）
 日本語ジェンダー学会（会員、理事）
 日本語法学会（会員）
 日本語用論学会（会員）
 日本コミュニケーション学会（会員）
 日本ジェンダー学会（会員、副会長）
 日本西洋古典学会（会員）
 日本ソロー学会（会員、会長、理事）
 日本第二言語習得学会（会員、運営委員）
 日本台湾学会（会員）
 日本中国学会（会員、評議員）
 日本中国語学会（会員）
 日本ディベート協会（会員、会長、理事）
 日本ディベート協会九州支部（会員、支部長）
 日本ドイツ語情報処理学会（会員）
 日本独文学会（会員）
 日本独文学会西日本支部（会員、支部長、編集委員長）
 日本認知科学会（会員）
 日本認知言語学会（会員）
 日本比較教育学会（会員）
 日本比較文学会（会員）
 日本比較文学会九州支部（会員）
 日本ヴィクトリア朝文化研究会（会員）
 日本フランス語学会（会員）
 日本フランス語フランス文学会（会員、編集委員、語学教員委員、運営委員）
 日本ルイス・キャロル協会（会員）
 日本歴史言語学会（会員、理事、監事）
 日本ロシア文学会（会員）
 日本ロマンス語学会（会員、理事、編集委員、事務局）
 人間の安全保障学会（会員）
 比較文明学会（会員）
 比較文明学会九州支部（会員、理事）
 東アジア言語文化研究会（会員、編集委員長、事務局長、会計監査）
 福岡英語学研究会（会員）
 福岡言語学会（会員、事務局）
 福岡日韓フォーラム（会員）
 福岡認知言語学会（会員）
 ロシア史研究会（会員、理事、編集委員）

・受賞

各種の受賞も高い研究成果の証である（④は教育関係）。

<表 19>受賞一覧

①	2016 劉轟、第3回中青年漢日対比言語学優秀成果賞・著作賞 International Association of Chinese-Japanese Contrastive Linguistics (IACJCL) 受賞著書『談話空間における文脈指示』（単著、京都大学学術出版会）、2015.
②	2018 横森大輔、第18回徳川宗賢賞（萌芽賞） 社会言語科学会 受賞論文「確認要求に用いられる感動詞的用法の『なに』－認識的スタンス標識の相互行為上の働き」『社会言語科学』第20巻1号,pp.100-114（受賞者：遠藤智子、横森大輔、林誠）
③	2019 内田諭、2019年度英語コーパス学会奨励賞 英語コーパス学会 受賞対象「リーディング・リスニングテキストのCEFRレベル判定ツールCVLAの開発と公開」
④	2019 中里見敬・劉轟、優秀指導教師賞 第1回全日本大学生中国語スピーチコンテスト決勝大会（桜美林大学） 日本華人教授会議主催
⑤	2019 内田諭、NLP若手の会(YANS)第14回シンポジウムスポンサー賞（サイバー賞） NLP若手の会 受賞発表「文脈ベクトルと細分化した単語ベクトルを用いた語彙的換言」（受賞者：芦原和樹、梶原智之、荒瀬由紀、内田諭）
⑥	2021 内田諭他、第9回Advanced Robotics Paper Awards（Advanced Robotics Best Survey Paper Award） 日本ロボット学会 受賞論文（受賞者）T. Taniguchi, D. Mochihashi, T. Nagai, S. Uchida, N. Inoue, I. Kobayashi, T. Nakamura, Y. Hagiwara, N. Iwahashi & T. Inamura (2019) Survey on frontiers of language and robotics, Advanced Robotics, 33:15-16, 700-730, DOI: 10.1080/01691864.2019.1632223

・公開講座・講演会等

本報告書の他項に掲載されているもの以外にも、本研究院主催の公開講座や、研究に関する本研究院（教員）等の主催による講演会等が多数行われている。

<表 20>本研究院（教員）等の主催による各種講演会等（他項掲載のものを除く）

H29年度
講演会（言語文化研究院主催） 「寛容を目指すヴォルテールの戦い」（フランソワ・ベシール教授（ルーアン大学）による講演） 2017年9月26日、九州大学西新プラザ
九州大学公開講座（言語文化研究院主催） 「異文化理解へのアプローチ：文学、メディアを通して」 （異文化理解を文学、メディアといった観点から解きほぐす。） 2017年10月28日～11月25日5回10h
H30年度
講演会（教員主催：劉轟） 「When?：外国語学習における最適な練習間隔を探る」 2018年10月29日、九州大学伊都キャンパス
講演会（教員主催：辻野裕紀） 「悩める精神科医がものを書くとき」（精神科医で作家の松嶋圭氏と構成員によるトーク） 2018年11月28日、九州大学伊都キャンパス
シンポジウム・公開講座（QRプログラム・九州大学中央図書館共同主催） 「物語の〈終わり/始まり〉：文学の現在、わたしたちの未来」 （学内競争資金QRプログラム(代表中里見敬)による作家2名を招聘しての対談・鼎談） 2019年2月8日、九州大学中央図書館きゅうとコモンズ

<p>シンポジウム（言語文化研究院主催） 「現代における揺れ動く身体と言語」（近代から現代に至る流れの中で、からだと言語を問い直す） 2019年03月17日、九州大学西新プラザ</p>
<p>R01 年度</p>
<p>講演会（言語文化研究院主催） The Atomic Age seen Through the Arts （本研究院 G.Decamous 准教授が MIT 出版局から刊行した書籍に関する講演） 2019年6月6日、九州大学中央図書館きゅうとコモンズ</p>
<p>九州大学公開講座（言語文化研究院主催） 「ことば研究における多面的アプローチ」 （コミュニケーションやその基礎となる言語の真相に対する多面的アプローチを解説。） 2019年11月23日～12月21日5回10h</p>
<p>講演会（教員主催：辻野裕紀） 「韓国語のお仕事の最前線～その表舞台と裏舞台～」 （NHK ラジオ「まいにちハンゲル講座」講師山崎玲美奈先生講演会） 2019年12月23日、九州大学伊都キャンパス</p>
<p>講演会（教員主催：伊藤薫） 「言語学における Universal Dependencies コーパスの応用と課題：工学向け言語資源をいかに活用するか」（科研費による研究の一環としての情報通信研究機構浅尾仁彦氏による講演） 2020年1月24日、九州大学伊都キャンパス</p>
<p>R02 年度</p>
<p>講演会（言語文化研究院協力） 「歩く文学、ソウルから東京・福岡まで—<文学>と<歩行>を通じた新たな日韓交流のかたち—」 「つきいち山手線一周ウォーク」 2020年10月3日 「韓国文学の魅力」 （作家イ・ジン、翻訳家岡裕美、作家姜信子、映画ライター佐藤結、本研究院辻野裕紀准教授によるトークイベント） 2020年10月3日、オンライン 「文学からみる韓国社会」 （作家イ・ジン、翻訳家岡裕美、作家姜信子、本研究院辻野裕紀准教授によるトークイベント） 2020年10月4日、九州大学西新プラザ 「詩人尹東柱ゆかりの地を歩く」 2020年10月5日</p>
<p>講演会（教員主催：辻野裕紀） 「旅すること、写真を撮ること」 石川直樹氏（写真家）による講演。 2021年1月12日 九州大学伊都キャンパス</p>
<p>R03 年度</p>
<p>九州大学公開講座（言語文化研究院主催） 「ゆらぐ人間像—近現代における思想と芸術のダイナミズム」 （19-20世紀西欧での人間の身体・生命・精神等の変化と芸術・文学との関係を論じる。） 2021年11月20日～12月18日、オンライン開催</p>
<p>講演会（教員主催：辻野裕紀） 「星野概念先生（精神科医・ミュージシャン）トークイベント」 星野概念氏によるトークイベント。 2022年1月22日、九州大学伊都キャンパス予定</p>

【教育】

・言語文化科目カリキュラムとその改革について

中期計画1には「平成29年度からのクォーター制導入に向けて英語・初修外国語ともにカリキュラムの見直しを行う。」とある。

九州大学の外国語科目である言語文化科目は、基幹教育院のもとで部局横断的に組織される基幹教育英語科目実施班、基幹教育初修外国語科目実施班により運営されている。これらの科目実施班では言語文化研究院の専任教員が多数を占めており、本研究院は言語文化科目の責任部局という位置づけにあって、これが本研究院教員の教育上の主務である。

<英語科目>

英語カリキュラムに関しては、英語科目の主たる担当部局として、本期間中に英語のカリキュラム（通称 Q-LEAP (Kyushu University Learning English for Academic Purposes)）の見直しを二度行った。平成29年度に策定し平成30年度より運営を始めた Q-LEAP2 では、1年次前期に受容と発信の基礎的な能力、1年次後期にそれらの技能を統合した能力、2年次には学生の選択によりテーマ別の受容能力やスキル別の発信能力の養成を目指した。平成30年からは共創学部の基幹教育英語科目 Intensive English の開講にも尽力した。さらに、Q-LEAP2 の検証をもとに、令和3年度からは、受容能力科目に議論力の養成、発信能力科目にリサーチペーパー作成の基礎力の養成を学習目標に加え、高年次学生の英語学習の発展および大学院進学への準備としての上級科目「学術英語・上級」を新たに開講し（受講できるようになるのは令和4年度から）、Q-LEAP3 としてカリキュラムを見直した。これらのカリキュラム策定において、開講される授業数における非常勤講師への依存コマ数を段階的に減らすことができた。

<表 21>英語カリキュラム

カリキュラム略称	期 間	特 徴
Q-LEAP	H24-H29 年度	学術英語カリキュラム
Q-LEAP2	H30-R02 年度	受容発信の基礎>統合技能>テーマ別スキル別選択
Q-LEAP3	R03 年度-現在	受信力開発>発信力開発>テーマ別スキル別選択>上級

*年度は1年生に適用される年度で、上位の学年では適用年度が遅くなる。

各年度の英語の開講科目は表 22 から表 27 のとおりである。共創学部以外の1年生科目は全科目が共通である。2年生以降については、学部学科により卒業所要単位数が変わり、また第1外国語を英語とするか英語以外の言語にするかなどによっても履修パターンが異なる。その他再履修方法等も含め、詳細については九州大学基幹教育院 HP から「学部基幹教育」>「履修・授業関連・その他科目履修について」>入学年度毎の「履修要項」を参照願いたい。

<表 22>英語科目の H28 年度の開講内容

	科目名称	開講コマ数	合計 コマ数	非常勤 コマ数
学術英語 1 (Q-LEAP) 1年生	リーディング・リスニング A	51	453	104
	リーディング・リスニング B	51		
	ライティング・スピーキング A	109		
	ライティング・スピーキング B	110		
	CALL A	5		
	CALL B	5		
学術英語 2 (Q-LEAP) 2年生	リーディング・リスニング	27		
	ライティング・スピーキング	18		
	オーラル・コミュニケーション	17		
	テスト・テイキング	20		
学術英語ゼミ (Q-LEAP) 2年生以上	リーディング・リスニング	5		
	ライティング・スピーキング	8		
	オーラル・コミュニケーション	9		
箱崎自由選択科目 (Q-LEAP) 2年生以上	英語会話 1	5		
	英語テスト・テイキング	3		
学術英語認定科目(Q-LEAP)		10		

<表 23>英語科目の H29 年度の開講内容

	科目名称	開講コマ数	合計 コマ数	非常勤 コマ数
学術英語 1 (Q-LEAP) 1年生	リーディング・リスニング A	51	445	92
	リーディング・リスニング B	51		
	ライティング・スピーキング A	109		
	ライティング・スピーキング B	110		
	CALL A	5		
	CALL B	5		
学術英語 2 (Q-LEAP) 2年生	リーディング・リスニング	27		
	ライティング・スピーキング	18		
	オーラル・コミュニケーション	17		
	テスト・テイキング	20		
学術英語ゼミ (Q-LEAP) 2年生以上	リーディング・リスニング	5		
	ライティング・スピーキング	8		
	オーラル・コミュニケーション	9		
学術英語認定科目(Q-LEAP)		10		

<表 24> 英語科目の H30 年度の開講内容

	科目名称	開講コマ数	合計 コマ数	非常勤 コマ数
学術英語 A (Q-LEAP2) 1 年生前期	リセプション	50	363	108
	プロダクション	86		
	CALL	5		
学術英語 B (Q-LEAP2) 1 年生後期	インテグレート	108		
	CALL	5		
学術英語 2 (Q-LEAP) 2 年生	リーディング・リスニング	27		
	ライティング・スピーキング	18		
	オーラル・コミュニケーション	17		
	テスト・テイキング	20		
学術英語ゼミ (Q-LEAP) 2 年生以上	リーディング・リスニング	4		
	ライティング・スピーキング	6		
	オーラル・コミュニケーション	7		
学術英語認定科目(Q-LEAP)		10		
Intensive English (共創学部 1 年生)	Global Issues RW 1	4		
	Global Issues RW 2	4		
	Global Issues LS 1	4		
	Global Issues LS 2	4		
	Academic Issues 1	4		
	Academic Issues 2	4		
	Academic Issues 3	4		
	Academic Issues 4	4		
	Japanese Issues 1	6		
	Japanese Issues 2	6		

<表 25> 英語科目の R01 年度の開講内容

	科目名称	開講コマ数	合計 コマ数	非常勤 コマ数
学術英語 A (Q-LEAP2) 1 年生前期	リセプション	50	352	87
	プロダクション	86		
	CALL	5		
学術英語 B (Q-LEAP2) 1 年生後期	インテグレート	108		
	CALL	5		
学術英語 C	テーマベース	24		

(Q-LEAP2) 2年生	スキルベース	28		
学術英語 C・集中演習(Q-LEAP2)		2		
Intensive English (共創学部1年生)	Global Issues RW 1	4		
	Global Issues RW 2	4		
	Global Issues LS 1	4		
	Global Issues LS 2	4		
	Academic Issues 1	4		
	Academic Issues 2	4		
	Academic Issues 3	4		
	Academic Issues 4	4		
	Japanese Issues 1	6		
Japanese Issues 2	6			

<表 26>英語科目の R02 年度の開講内容

	科目名称	開講コマ数	合計 コマ数	非常勤 コマ数
学術英語 A (Q-LEAP2) 1年生前期	リセプション	48	350	81
	プロダクション	91		
	CALL	5		
学術英語 B (Q-LEAP2) 1年生後期	インテグレート	110		
	CALL	5		
学術英語 C (Q-LEAP2) 2年生	テーマベース	30		
	スキルベース	15		
学術英語 C・集中演習(Q-LEAP2)		2		
Intensive English (共創学部1年生)	Global Issues RW 1	4		
	Global Issues RW 2	4		
	Global Issues LS 1	4		
	Global Issues LS 2	4		
	Academic Issues 1	4		
	Academic Issues 2	4		
	Academic Issues 3	4		
	Academic Issues 4	4		
	Japanese Issues 1	6		
Japanese Issues 2	6			

<表 27>英語科目の R03 年度の開講内容

	科目	開講コマ数	合計 コマ数	非常勤 コマ数		
学術英語 (Q-LEAP3) 1年生	アカデミックイシューズ	48	353	75		
	グローバルイシューズ	48				
	プロダクション 1	75				
	プロダクション 2	75				
	CALL 1	5				
	CALL 2	5				
学術英語 C (Q-LEAP2) 2年生	テーマベース	32				
	スキルベース	19				
学術英語・集中演習(Q-LEAP3)		2				
Intensive English (共創学部 1 年生)	Global Issues RW 1	4				
	Global Issues RW 2	4				
	Global Issues LS 1	4				
	Global Issues LS 2	4				
	Academic Issues 1	4				
	Academic Issues 2	4				
	Academic Issues 3	4				
	Academic Issues 4	4				
	Japanese Issues 1	6				
	Japanese Issues 2	6				

学生の自律学習のための教材開発としては、表 28 にまとめているように、EEP (Enhanced Education Program : 教育の質向上支援プログラム) や NEEP (Next Enhanced Education Program : 教育の質向上支援プログラム) などの学内支援により、英語の語彙力向上のための『九大英単』(H24 年度-H25 年度) に続き、受容能力向上のための *Authentic Reader—A Gateway to Academic English* (委員会方式で編集)、発信能力向上のための *A Gateway to Academic Writing and Presentation* (プロジェクト構成員で編集)、共創学部生のための『ワールドクエス—世界とつながる上級英単』(本研究所属の共創学部専任教員が中心となり委員会方式で編集) を出版した。この発信能力養成の教材は e-learning 教材としても開発され、『九大英単』の語彙を使い Moodle の問題バンクを作成するなど、多様な学習のプラットフォーム作りを行なっている。さらに、オンライン授業への対応としては、リアルタイム型に加えて、各科目にオンデマンド型の授業も準備した。また、平成 29 年度に新しく策定されたカリキュラム Q-LEAP2 を実施していく中で、新制度の再検証を行い、より効果的なカリキュラム Q-LEAP3 に再編成していった。

<表 28>英語関係の教材開発（学内競争資金による支援も）

取組期間	競争資金名	取組名	発刊物
H26-H27 年度 発刊 H28 年度	教育の質向上支援 プログラム(EEP)	領域横断型の英語読解聴解教材開発 -CLIL (内容言語統合型学習) 支援 の取り組み	H28 年度発刊(研究社) <i>Authentic Reader</i>
H29 年度	-	『アクティブラーニングを強力にサ ポートする WebOCMnext 2017 年度 版 九州大学基幹教育言語文化科目 「学術英語 1 CALL-A/B」受講案内 書』	H29 年度発刊(成美堂) 同左
R02 年度	-	『ワードクエスト-世界とつながる 上級英単』	R02 年度発刊(九大出版 会) 同左
H30-R02 年度 発刊 R03 年度	教育の質向上支援 プログラム (NEEP)	アカデミック・ライティング&プレ ゼンテーション教材開発-英語で科 学するアクティブ・ラーナー育成に向けて-	R03 年度発刊(電子ファイル) <i>A Gateway to Academic Writing and Presentation</i>

<初修外国語科目>

初修外国語科目実施班（言語文化研究院内の組織ではないが、本研究院の活動として記述する。以下も同様）では、原則として入学者全員に対し、各学生の選択希望に応じ、基幹教育の「言語文化科目」としてドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、韓国語、ロシア語の 6 言語の授業を提供している。初めて習う言語そのものの学習だけでなく、その言語の発想法や背景における文化を理解することで、思考の幅広さを涵養することを目標とする。各言語 1 年生を対象とした前期基礎科目「〇〇語 I」と 1 年生後期に実施される「〇〇語 II」についての具体的な到達目標は表 33 のとおりであり、「〇〇語 II」では客観基準のランクを 1 つ上げたものとなっている。

<表 29> 1 年生の到達度目標

	目 標	1 年前期	1 年後期
ドイツ語	ドイツ語学文学振興会「ドイツ語検定試験」	4 級	3 級
フランス語	フランス語教育振興協会「実用フランス語技能検定試験」	4 級	3 級
中国語	日本中国語検定協会「中国語検定試験」	準 4 級	4 級
スペイン語	日本スペイン協会「スペイン語技能検定」	5 級	4 級
韓国語	ハングル能力検定協会「ハングル能力検定試験」	5 級	4 級
ロシア語	東京ロシア語学院「ロシア語能力検定試験」	4 級	

また、文系学部等の学生については、「〇〇語 III」という、よりレベルの高い授業を実施する。その到達目標は、上記の各検定試験の基準ランクを原則として 1 つ上げたものとなっている。

さらに、「〇〇語 I」、「〇〇語 II」を学習しながら、学習言語=目標言語の運用能力を鍛えるために、「ドイツ語プラクティクム I, II」、「フランス語プラクティク I, II」、「中国語実践 I, II」を、また、学習言語の文化的・社会的背景を理解するために、「ロシア語フォーラム」、「韓国語フォーラム」、「スペイン語フォーラム」といった授業を提供した。

「〇〇語Ⅰ」と「〇〇語Ⅱ」を履修済の学生が、より高度な語学力を獲得するための実践的にして少人数で行なう「言語文化自由選択科目」も別途に設けた。

なお、令和3年度には、「〇〇語Ⅰ」と「〇〇語Ⅱ」においていわゆる「クォーター制」が導入された結果、「〇〇語Ⅰ」と「〇〇語Ⅱ」は、おのおの「〇〇語ⅠA」「〇〇語ⅠB」、「〇〇語ⅡA」「〇〇語ⅡB」と細分割され（令和4年度からは元に戻る予定である）、また「〇〇フォーラム」や「言語文化自由選択科目」を廃止した一方、令和3年度からではあるが、「〇〇語Ⅳ」と「ドイツ語プラクティクムⅢ」、「フランス語プラクティクⅢ」、「中国語実践Ⅲ」、「韓国語表現演習Ⅰ、Ⅱ」、「スペイン語表現演習Ⅰ、Ⅱ」という科目が新設されることとなった。

この他詳しくは九州大学基幹教育院 HP から「学部基幹教育」>「履修・授業関連・その他科目履修について」>入学年度毎の「履修要項」を参照願いたい。

平成28年度は主として伊都地区で各言語の授業を展開した（詳細は表34を参照）。前年度と同様に、文系等の学生に対しては、「〇〇語Ⅲ」に相当するレベルの授業を、箱崎文系地区において実施した。2年生についてはいわゆる「伊都日」がなくなったための措置であり、文系地区の伊都移転まではこうした授業方式になった。また授業の枠外で「外国語プレゼンテーション・コンテスト」を引き続き行くとともに、新たに「外国語週間」を企画した。さらに、国際部と協働して、中国語・韓国語の短期海外研修（CLP）の実施に加え、授業の枠外でドイツ・インターンシップ海外研修を行なった。

平成29年度も主として伊都地区で各言語の授業を展開した（詳細は表30を参照）。前年度と同様に、文系等の学生に対しては、「〇〇語Ⅲ」に相当するレベルの授業を、箱崎文系地区において実施した。また従来、授業の枠外で行っていた「外国語プレゼンテーション・コンテスト」を、平成29年度冬クォーターにおいて総合科目（オープン科目）の集中講義「外国語プレゼンテーション」として開講した（英語科目実施班と共同）。授業の最終回には「外国語プレゼンテーション・コンテスト」を開催し、42名の受講生が成果を披露した。言語学習の動機づけを高め、留学を視野に入れるために行なっている「外国語週間」は2回目となり、映画上映や講演など、7つの企画を実施した。さらに、国際部と協働して、中国語の短期海外研修（CLP-C）を行なったほか、ドイツ・インターンシップ海外研修も例年どおり実施した。留学生と外国語を使って交流する「ランゲージテーブル」は、昼休みなどにSALCで行っている学生主体の活動だが、初修外国語科目実施班は国際部とともに運営や広報を支援している。平成29年度は中国語・韓国語・ロシア語の3言語に広がり、特色ある取り組みとして、北海道大学などから視察に来られた。

平成30年度は伊都地区で1年生向けの授業を展開したほか、文系等の2年生に対しては「〇〇語Ⅲ」に相当するレベルの授業を、箱崎文系地区において実施した（詳細は表30を参照）。「言語文化自由選択科目」については、前期は箱崎分室、後期はキャンパス移転により伊都キャンパスにおいて開講した。平成30年度冬学期には、フロンティア科目として「外国語プレゼンテーション」を集中講義の形態で開講した（英語科目実施班と共同）。多彩な

外部講師の講義を交えながら、授業の最終回には「外国語プレゼンテーション・コンテスト」を開催し、受講生全員が学習成果を披露した。言語学習の動機づけを高め、留学を視野に入れるために行なっているイベント「外国語週間」は3回目となり、映画や講演など6本の企画を実施した。さらに、国際部と協働して、中国語の短期海外研修（CLP-C）を行ったほか、ドイツ・インターンシップ海外研修も例年どおり実施した。留学生と外国語を使って交流する「ランゲージテーブル」は、昼休みなどにSALCで行っている学生主体の活動だが、初修外国語科目実施班は国際部とともに運営や広報を支援している。平成30年度は英語・中国語・韓国語・フランス語・スペイン語・日本語の6言語へと広がり、本学の特色ある取り組みとなっている。

令和元年度は伊都地区で1年生向けの授業を展開したほか、文系等の2年生に対しては「〇〇語Ⅲ」に相当するレベルの授業を実施した（詳細は表34を参照）。さらに、言語文化自由選択科目を伊都で開講した。令和元年度冬学期には、フロンティア科目として「外国語プレゼンテーション」を集中講義の形態で開講した（英語科目実施班と共同）。多彩な外部講師の講義を交えながら、最終回の授業では「外国語プレゼンテーション・コンテスト」を開催し、受講生全員が学習成果を披露した。言語学習の動機づけを高め、留学を視野に入れるために行っているイベントである「外国語週間」は4回目となり、講演など6本の企画を実施した。さらに、国際部と協働して中国語の短期海外研修（CLP-C）を行ったほか、「ドイツ・インターンシップ研修」も例年どおり実施した。留学生と外国語を使って交流する「ランゲージテーブル」は、SALCで行っている学生主体の活動だが、初修外国語科目実施班は国際部とともに運営や広報を支援している。「ランゲージテーブル」は英語・中国語・韓国語・フランス語・スペイン語・日本語の6言語に広がっている。令和3年度からの基礎科目（「〇〇語Ⅰ、Ⅱ」）におけるクォーター制の導入および、2年前期に「〇〇表現演習Ⅰ」、後期に「〇〇語Ⅳ」と「〇〇表現演習Ⅱ」の配置を決定した。また、非常勤講師への依存率を下げるために、カリキュラムの「スリム化」を企図した。

令和2年度は伊都地区で1年生向けの授業を展開したほか、文系等の2年生に対しては「〇〇語Ⅲ」に相当するレベルの授業を実施した（詳細は表34を参照）。さらに言語文化自由選択科目を伊都地区で開講した。ただし、コロナ禍のために授業が遠隔形式になり、オンライン授業が実施された。冬学期には、フロンティア科目として「外国語プレゼンテーション」を集中講義の形態で開講した（英語科目実施班と共同）。8回の授業及びプレゼンテーション・コンテストはオンラインで行われた。コロナ禍のため、中国語の短期海外研修（CLP-C）はオンラインで行われたが、「ドイツ・インターンシップ研修」は中止になった。その代替としてドイツの職業学校の生徒との間にZoomミーティングを設け、日本とドイツの文化について話し合った。留学生と外国語を使って交流する「ランゲージテーブル」は、SALCで行っている学生主体の活動だが、初修外国語科目実施班は国際部とともに運営や広報を支援している。「ランゲージテーブル」は英語・中国語・韓国語・フランス語・スペイン語・日本語・ロシア語・マレー語の8言語に広がっている。

令和3年度は伊都地区で1年生向けの授業を展開したほか、文系等の2年生に対しては「〇〇語Ⅲ」に相当するレベルの授業を実施している（詳細は表30を参照）。令和3年度に、基礎科目（「〇〇語Ⅰ、Ⅱ」）においてクォーター制が導入されているほか、2年前期に「〇〇表現演習Ⅰ」、後期に「〇〇語Ⅳ」と「〇〇表現演習Ⅱ」の授業が提供されている。ただし、コロナ禍のために授業が対面・遠隔というハイブリッド形式になっている。冬学期には、フロンティア科目として「外国語プレゼンテーション」を集中講義の形態で開講する（英語班と共同）。8回の授業及び「プレゼンテーション・コンテスト」はオンラインで行われた。コロナ禍のため、中国語の短期海外研修（CLP-C）はオンラインで行われたが、「ドイツ・インターンシップ研修」を再開する計画はある。留学生と外国語を使って交流する「ランゲージテーブル」は、SALCで行っている学生主体の活動だが、初修外国語科目実施班は国際部とともに運営や広報を支援している。「ランゲージテーブル」は英語・中国語・韓国語・フランス語・スペイン語・日本語・ロシア語・マレー語の8言語に広がっている。

少し次期の予定について触れておく。令和3年度のカリキュラム改正に合わせて、初修外国語における「〇〇語Ⅰ」、「〇〇語Ⅱ」の授業をそれぞれクォーター化した。しかし、クォーター制を導入することによって、前期・後期で開講される「Ⅰ・Ⅱ」は春・夏・秋・冬学期で開講される「ⅠA・ⅠB・ⅡA・ⅡB」へと変更されたが、週2回で開講される「ⅠA・ⅠB・ⅡA・ⅡB」はそれぞれ一つのユニットとなったため、実際に授業を運営したところ様々な問題が生じることがわかり、令和4年度（第4期に入る）以降は従来通りの Semester 制に戻すという決定に至った。

表34は期間中の各年度における開講コマ数（Semester（換算））である。毎年度入学者の初修外国語の選択は原則として第1希望が叶えられている。

<表30>初修外国語科目開講科目

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R01 年度	R02 年度	R03 年度
ドイツ語	85	75	63	56	52	52
ドイツ語Ⅰ	38	34	26	22	22	22 (ⅠA/ⅠB にクォーター化)
ドイツ語Ⅱ	34	30	26	22	22	22 (ⅡA/ⅡB にクォーター化)
ドイツ語Ⅲ	4	3	3	3	3	3
ドイツ語プラクティクムⅠ	2	2	2	2	2	2
ドイツ語プラクティクムⅡ	1	1	1	1	1	1
ドイツ語オーラル・リスニング演習Ⅰ	1	1	1	1	1	--
ドイツ語オーラル・リスニング演習Ⅱ	1	1	1	1	1	--
ドイツ語表現読解演習Ⅰ	1	1	1	1	0	1
ドイツ語表現読解演習Ⅱ	1	1	1	1	0	1
入門ドイツ語Ⅰ	1	1	1	1	0	--
入門ドイツ語Ⅱ	1	0	0	1	0	--

フランス語	43	43	45	41	37	37
フランス語 I	16	16	16	14	14	14 (IA/IB にクォーター化)
フランス語 II	14	14	16	14	14	14 (IIA/IIB にクォーター化)
フランス語 III	3	3	3	3	3	3
フランス語プラティク I	2	2	2	2	2	2
フランス語プラティク II	2	2	2	2	2	2
フランス語実用会話	2	2	2	2	1	1
フランス語読解・作文コース	1	1	1	1	1	--
フランス語圏の言語と文化	1	1	1	1	0	1
入門フランス語 I	1	1	1	1	0	--
入門フランス語 II	1	1	1	1	0	--
中国語	102	115	119	127	123	123
中国語 I	41	48	50	54	54	54 (IA/IB にクォーター化)
中国語 II	40	48	50	54	54	54 (IIA/IIB にクォーター化)
中国語 III	8	7	4	4	4	4
中国語実践 I	3	3	4	4	5	5
中国語実践 II	2	3	5	5	4	4
中国語オーラル・リスニング演習 I	1	1	1	1	1	--
中国語オーラル・リスニング演習 II	1	1	1	1	0	1
中国語表現・読解演習 I	1	1	1	1	1	--
中国語表現・読解演習 II	1	1	1	1	0	1
入門中国語 I	1	1	1	1	0	--
入門中国語 II	1	1	1	1	0	--
スペイン語	44	44	48	48	46	44
スペイン語 I	18	18	20	20	20	20 (IA/IB にクォーター化)
スペイン語 II	18	18	20	20	20	20 (IIA/IIB にクォーター化)
スペイン語 III	3	3	3	3	3	3
スペイン語フォーラム	1	1	1	1	1	--
スペイン語圏の言語と文化	1	0	1	0	1	--
総合スペイン語演習	0	1	0	1	0	1
表現スペイン語	1	1	1	1	1	--
入門スペイン語 I	1	1	1	1	0	--
入門スペイン語 II	1	1	1	1	0	--
韓国語	35	43	51	55	53	50
韓国語 I	14	18	22	24	24	24 (IA/IB にクォーター化)

韓国語 II	14	18	22	24	24	24 (IIA/IIB にクォーター化)
韓国語 III	2	2	2	2	2	2
韓国語フォーラム	1	1	1	1	1	--
韓国語表現・読解演習 I	1	1	1	1	1	--
韓国語表現・読解演習 II	1	1	1	1	1	--
入門韓国語 I	1	1	1	1	0	--
入門韓国語 II	1	1	1	1	0	--
ロシア語	11	11	11	11	9	10
ロシア語 I	3	3	3	3	3	4 (IA/IB にクォーター化)
ロシア語 II	3	3	3	3	3	4 (IIA/IIB にクォーター化)
ロシア語 III	2	2	2	2	2	2
ロシア語フォーラム	1	1	1	1	1	--
入門ロシア語 I	1	1	1	1	0	--
入門ロシア語 II	1	1	1	1	0	--

*開講数は前年度の計画段階のものに揃えている。すべてセメスター（換算）のコマ数。

*令和3年度にクォーター化された科目は、令和4年度から再びセメスター制度に戻る予定。

表31のように、卒業のために必修とはならない外国語科目（インドネシア語、イタリア語、オランダ語、エスペラント）や古典語科目も開講されてきたが、非常勤講師削減のため、令和2年度限りで廃止となった。

<表31>必修でない外国語科目と古典語科目

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R01 年度	R02 年度	R03 年度
入門インドネシア語 I	1	1	1	1	1	--
入門インドネシア語 II	1	1	1	1	1	--
入門イタリア語 I	1	1	1	1	1	--
入門イタリア語 II	1	1	1	1	1	--
速習オランダ語	1	1	1	1	1	--
速習エスペラント	1	1	1	1	1	--
古典ギリシア語 I	1	1	1	1	1	--
古典ギリシア語 II	1	1	1	1	1	--
ラテン語 I	1	1	1	1	1	--
ラテン語 II	1	1	1	1	1	--

中期計画2には「英語・初修外国語ともに、学生の自律学習を支援するため、Web 教材の充実、e-ラーニングの充実を図っていく」とある。

英語関係では、オンデマンドで学習を進める CALL (Computer-Assisted Language Learning) 科目について、独自のクラウドサーバと独自の LMS (Learning Management System) 利用による運営から、令和元年度より九州大学の推進する Moodle システムでの運用のために教材システムの移植や修正を行った。これにより安定的に学習管理ができるようになった。

初修外国語では、中国語における発音・文法に関するウェブ補助教材の利用、スペイン語におけるウェブ教材の開発が挙げられる。

その他、コロナ禍におけるオンライン授業の対応には力を入れた。令和2年度前期の全面オンライン授業の導入にあたっては、本研究院独自にオンライン授業対応チームを結成し、Moodle での授業サイトの運営、九州大学が導入している Office365 や OneDrive の活用方法、教材作成の著作権的側面、YouTube の活用方法、Skype for Business の活用方法などに関するガイドブックを日英語併記にて作成した。また、Zoom の活用方法のワークショップを開催し、令和3年度後期からは部局として Zoom の一括契約を行った。因みに大学では Microsoft Teams/Webex が会議用・授業用に供用されている。

・外国語異文化学習を支援する行事

中期計画2には「英語・初修外国語教員が協力して開催してきた外国語プレゼンテーション・コンテスト、海外の大学と共同で行ってきたディベート活動等をより充実させる。」、中期計画10には「外国語プレゼンテーション・コンテストその他の教育活動を継続・発展させる。」とある。

本研究院では、中期計画に基づき、英語および初修外国語担当教員が協力し、外国語プレゼンテーション・コンテストを開催し、学生による外国語学習の成果発表を行った。平成28年度までは、ライティングの授業などで参加者を募り、教員による課外指導などを経て実施をしてきたが、平成29年度からは、基幹教育の総合科目(クォーター科目)「外国語プレゼンテーション」を開講し、コンテスト参加希望者の受講を義務付け、コンテスト参加をこの科目の単位要件とした。また、海外の大学と共同で行う即興型ディベートの授業(短期集中総合科目「九州大・梨花女子大合同冬季ディベート」)の開講や学生主体の即興型のディベート大会(Kyushu Debate Open)の運営などにより、学生の議論能力の養成に寄与した。さらに、外国語週間では、外国語や異文化学習への学生の興味や関心を引き出すための外国語ごとの催しを企画・実行した。これらの諸行事の中には、残念ながらコロナ禍にあって継続できていないものもある。

<表 32> 「外国語プレゼンテーション・コンテスト」運営担当者と参加外国語

	運営担当者	英	独	仏	中	西	韓	露
H28 年度	田中俊也、土屋智行、横森大輔	○	○	○	○	○	○	○
H29 年度	田中俊也、岡本太助、浜本裕美、蔦原亮、劉轟	○	○	○	○	○	○	○

H30 年度	田中俊也、志水俊広、岡本太助、G・デカマス、葛原亮	○	○	○	○	○	○
R01 年度	志水俊広、G・デカマス、葛原亮、大塚知昇	○	○	○	○	○	○
R02 年度	志水俊広、大塚知昇	○	○	○	○	○	○
R03 年度	G・デカマス、S・オドワイヤー	○	○	○	○	○	○

<表 33> 基幹教育総合科目「外国語プレゼンテーション」担当者

	授業運営	講義	英語担当	初修担当
H29 年度	中里見敬	井上奈良彦(入門)	高橋勤、鈴木右文	各語科
H30 年度	佐藤正則	井上奈良彦(入門) 柴崎行雄(技法)	浜本裕美、C・ハズウェル	各語科
R01 年度	中里見敬	井上奈良彦(入門)、S・ オドワイヤー、古賀尚子 * (技法)	下條恵子、S・オドワイヤー	各語科
R02 年度	阿部吉雄	鈴木右文・伊藤薫(入門)	S・レイク、C・ハズウェル、S・オドワイヤー	各語科
R03 年度	辻野裕紀	井上奈良彦(入門)	G・デカマス、S・オドワイヤー	各語科

* 古賀尚子氏は非常勤講師。

<表 34> 基幹教育総合科目「九州大・梨花女子大合同冬季ディベート」

H28 年度	Kyushu-Ewha Joint Winter Debate 2017	2017 年 2 月	参加者約 20 名
H29 年度	Kyushu-Ewha Joint Winter Debate 2018	2018 年 2 月	参加者約 20 名
H30 年度	Kyushu-Ewha Joint Winter Debate 2019	2019 年 2 月	参加者約 40 名
R01 年度	Kyushu-Ewha Joint Winter Debate 2020	2020 年 2 月	参加者約 40 名
R02 年度	Kyushu-Ewha Joint Winter Debate 2021	2021 年 1 月	参加者約 30 名
R03 年度	Kyushu-Ewha Joint Winter Debate 2022	2022 年 2 月	参加者約 30 名

<表 35> 学生主体の即興型のディベート大会「Kyushu Debate Open」

H28 年度	Kyushu Cup 2016	2016 年 8 月	参加者約 150 名
H29 年度	Kyushu Debate Open 2017	2017 年 8 月	参加者約 170 名
H30 年度	Kyushu Debate Open 2018	2018 年 8 月	参加者約 200 名
R01 年度	Kyushu Debate Open 2019	2019 年 8 月	参加者約 200 名
R02 年度	Kyushu Debate Open 2020	中止	中止
R03 年度	Kyushu Debate Open 2021	中止	中止

<表 36> その他のディベート関係の行事

H28 年度	九州地区春期ディベート練習会（言語文化研究院・九州大学ディベートクラブ・DEAR くまもと主催） 九州地区の中学生、高校生を対象としたディベート練習会。 2016 年 4 月 3 日 九州大学大橋キャンパス 13th Exchange Debate Contest/第 13 回英語交流ディベート大会（JDA 九州支部、大学院言語文化研究 院主催）
--------	--

幅広い層が英語討論による交流を深めた。 2016年7月23日 西南学院大学
Kyushu Cup 2016 (言語文化研究院主催、文部科学省・外務省後援) 即興型英語ディベート大会 (世界大会準拠のブリティッシュ・バーラメンタリー形式)。 2016年8月26-28日 九州大学伊都キャンパス
第13回JDA九州ディベート講座 (日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州大学大学院基幹教育科目として開講。 2016年10月1日 九州大学伊都キャンパス
第5回九州大学ディベートクラブカップ (QDC杯) 大会 (QDC杯実行委員会主催、言語文化研究院は共催) 九州地区の学生 (中高生を含む) のスキル向上を図って提供される実戦の場としての大会。 2016年10月9日 九州大学大橋キャンパス
第14回JDA九州ディベート大会 (日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 関東・関西からも参加する全国大会。 2016年12月18日 九州大学伊都キャンパス
Judging Competitive Debate (言語文化研究院が主催) 高校教員、ディベート指導者向け講座。言語文化科目「学術英語認定科目」を開放する形。 2017年2月17日 九州大学伊都キャンパス
九州大学・梨花女子大学合同ディベート講座 (言語文化研究院は共催) 韓国梨花女子大学校教員学生を招聘しての講義とディベート。覚書に基づいて開催。 2017年2月20-22日 九州大学伊都キャンパス
第5回バレンタイン杯ディベート大会 (九州大学ディベートクラブ・DEAR くまもと主催、言語文化研究院は共催) 中学、高校、大学生の初心者向け日本語ディベート大会。 2018年2月12日 九州大学大橋キャンパス
H29年度
九州地区春期ディベート練習会 (全国教室ディベート連盟九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州地区の中学生、高校生を対象としたディベート練習会。 2017年4月2日 九州大学伊都キャンパス
九州地区夏季ディベート講座 (全国教室ディベート連盟九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州地区の中学生、高校生を対象としたディベート講座。 2017年6月4日 九州大学伊都キャンパス
日米交歓ディベート (日本ディベート協会九州支部・九州大学 ESS・言語文化研究院共同主催) 国際コース授業訪問、公開ディベート、講演等。 2017年6月13日 九州大学伊都キャンパス
九州地区中学・高校ディベート選手権大会 (全国教室ディベート連盟九州支部・読売新聞社主催、言語文化研究院は共催) 第22回ディベート甲子園九州地区予選。 2017年7月1-2日 九州大学伊都キャンパス
14th Exchange Debate Contest (日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州地区の大学生初心者チームや高校生チームが対戦。 2017年7月8日 九州大学伊都キャンパス
Kyushu Debate Open 2017 (Kyushu Debate Open 2017 実行委員会主催、文部科学省・外務省後援、言語文化研究院は共催) 即興型英語ディベート大会。 2017年8月19-20日 九州大学伊都キャンパス
第6回国際日本語ディベート講座・大会 (ディベート教育国際研究会・日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 講座と大会。九州大学基幹教育総合科目でもある。 2017年8月21-25日 九州大学九重山の家
国際親善ディベート (言語文化研究院が主催) 韓国梨花女子大学校教員学生を招聘しての講義とディベート。覚書に基づいて開催。 2017年8月21-23日 九州大学伊都キャンパス
国際親善ディベート (言語文化研究院が主催) 「韓国親善ディベート」で九大生が韓国梨花女子大学校を訪問してのディベート研修。覚書に基づく。 2017年9月10-19日 韓国梨花女子大学校
第14回JDA九州ディベート講座 (日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州大学大学院基幹教育科目と基幹教育院・教育関係共同利用拠点研修の合同開講。 2017年10月22日 九州大学伊都キャンパス
第15回JDA九州ディベート大会 (日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 関東・関西からも参加する全国大会。 2017年12月10日 九州大学伊都キャンパス
国際親善ディベート (韓国梨花女子大学校英文科・言語文化研究院共同主催) 韓国梨花女子大学校教員学生を招聘して基幹教育総合科目として開講。

<p>2018年1月12-14日 九州大学伊都キャンパス 第6回バレンタイン杯ディベート大会(九州大学ディベートクラブ・DEAR くまもと主催、言語文化研究院は共催) 中学、高校、大学生の初心者向け日本語ディベート大会。 2018年2月11日 九州大学大橋キャンパス</p>
<p>H30年度</p>
<p>九州地区春期ディベート練習会(全国教室ディベート連盟九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州地区の中学生、高校生を対象としたディベート練習会。 2018年4月8日 九州大学大橋キャンパス</p>
<p>九州地区夏期ディベート講座(全国教室ディベート連盟九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州地区の中学生、高校生を対象としたディベート講座。 2018年5月27日 九州大学大橋キャンパス</p>
<p>九州地区中学・高校ディベート選手権大会(全国教室ディベート連盟九州支部・読売新聞社主催、言語文化研究院は共催) 第23回ディベート甲子園九州地区予選。 2018年6月23-24日 九州大学箱崎キャンパス</p>
<p>15th Exchange Debate Contest(日本ディベート協会九州支部・言語文化研究院共同主催) 九州地区の大学生初心者チームや高校生チームが対戦。 2018年7月14日 九州大学伊都キャンパス</p>
<p>Kyushu Debate Open 2018(Kyushu Debate Open 2018 実行委員会主催、文部科学省・外務省後援、言語文化研究院は共催) 即興型英語ディベート大会。 2018年8月18-19日 九州大学伊都キャンパス</p>
<p>第7回国際日本語ディベート講座・大会(ディベート教育国際研究会・日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 講座と大会。九州大学基幹教育総合科目でもある。 2018年8月15-19日 九州大学九重山の家</p>
<p>国際親善ディベート(言語文化研究院が主催) 韓国梨花女子大学校教員学生を招聘しての講義とディベート。覚書に基づいて開催。 2018年8月15-17日 九州大学伊都キャンパス</p>
<p>第7回QDC杯ディベート大会(九州大学ディベートクラブ・言語文化研究院共同主催) 年齢制限のないディベート競技会。 2018年9月23日 九州大学大橋キャンパス</p>
<p>第15回JDA九州ディベート講座(日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州大学大学院基幹教育科目と基幹教育院・教育関係共同利用拠点研修の合同開講。 2018年10月27日 九州大学伊都キャンパス</p>
<p>国際親善ディベート(韓国梨花女子大学校英文科・言語文化研究院共同主催) 韓国梨花女子大学校教員学生を招聘して基幹教育総合科目として開講。 2019年2月14-16日 九州大学伊都キャンパス</p>
<p>第7回バレンタイン杯ディベート大会(九州大学ディベートクラブ・DEAR くまもと主催、言語文化研究院は共催) 中学、高校、大学生の初心者向け日本語ディベート大会。 2019年2月11日 九州大学大橋キャンパス</p>
<p>第2回日本語ディベート選手権国際大会(台湾・国立交通大学主催、言語文化研究院共催) 日本語学習者と母語話者がチームを作り大会に参加する。 2019年2月下旬 台湾・国立交通大学</p>
<p>九州地区春期ディベート練習会(全国教室ディベート連盟九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州地区の中学生、高校生を対象としたディベート練習会。 2019年3月31日 九州大学伊都キャンパス</p>
<p>R01年度</p>
<p>九州地区夏期ディベート練習会(全国教室ディベート連盟九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州地区の中学生、高校生を対象としたディベート講座。 2019年5月12日 九州大学大橋キャンパス</p>
<p>日米交歓ディベート(日本ディベート協会九州支部・九州大学 ESS・言語文化研究院共同主催) 国際コース授業訪問、公開ディベート、講演等。 2019年6月14-15日 九州大学伊都キャンパス</p>
<p>九州地区中学・高校ディベート選手権大会(全国教室ディベート連盟九州支部・読売新聞社主催、言語文化研究院は共催) 第24回ディベート甲子園九州地区予選。 2019年6月15-16日 熊本マリスト学園</p>
<p>16th Exchange Debate Contest(日本ディベート協会九州支部主催、西南学院大学文学部英文科・言語文化研究院共催)</p>

九州地区の大学生初心者チームや高校生チームが対戦。 2019年7月13日 西南学院大学
Kyushu Debate Open 2019 (Kyushu Debate Open 2019 実行委員会主催、文部科学省・外務省後援、共創学部・ディベート教育国際研究会・言語文化研究院共催) 即興型英語ディベート大会。国内外から最大チーム参加の、日本最大規模の世界大会形式国際競技会。 2019年8月10-11日 九州大学伊都キャンパス
第8回国際日本語ディベート講座・大会 (ディベート教育国際研究会・日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 講座と大会。九州大学基幹教育総合科目でもある。 2019年8月28日-9月1日 九州大学九重山の家
国際親善ディベート「International Friendship Debate」(言語文化研究院が主催) 韓国梨花女子大学校教員学生を招聘しての講義とディベート。覚書に基づいて開催。 2019年7月13-14日 九州大学伊都キャンパス
第16回JDA九州ディベート講座 (日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州大学大学院基幹教育科目と基幹教育院・教育関係共同利用拠点研修の合同開講。 2019年10月20日 九州大学伊都キャンパス
第8回QDC杯ディベート大会 (九州大学ディベートクラブ主催・言語文化研究院共同主催) 年齢制限のないディベート競技会。 2019年10月6日 九州大学大橋キャンパス
第17回JDA九州ディベート大会 (日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 九州大学大学院基幹教育科目と基幹教育院・教育関係共同利用拠点研修の合同開講。 2019年12月7日 九州大学伊都キャンパス
Winter Exchange Debate Contest 2020 (日本ディベート協会九州支部主催、共創学部共催、言語文化研究院は共催) 参加者約100人の英語ディベート大会。 2020年1月11日 九州大学伊都キャンパス
国際親善ディベート「九州大学・梨花女子大合同授業」(韓国梨花女子大学校英文科・言語文化研究院共同主催) 韓国梨花女子大学校教員学生を招聘して基幹教育総合科目として開講。 2020年1月17-19日 九州大学伊都キャンパス
第8回バレンタイン杯ディベート大会 (九州大学ディベートクラブ・DEAR くまもと主催、言語文化研究院は共催) 中学、高校、大学生の初心者向け日本語ディベート大会。 2020年2月9日 九州大学大橋キャンパス
第6回ディベート教育国際研究会大会 (ディベート教育国際研究会主催、言語文化研究院は共催) ディベートと議論教育に関する研究発表、実践報告。 2020年3月14-15日 九州大学伊都キャンパス
R02年度
第8回国際日本語ディベート講座 (JDA 日本ディベート協会九州支部・ディベート教育国際研究会主催、言語文化研究院は共催) 中国、韓国、台湾、日本から教員と学生が参加した講座。 2020年8月23-30日 オンライン開催
第17回JDA九州ディベート講座 (JDA 日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) ディベートを教育活動に取り入れたいと考えている教職員、院生を対象とした講座。 2020年10月24日 オンライン開催
第18回JDA九州ディベート大会 (JDA 日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催) 競技会。 2020年12月13日 オンライン開催
国際親善ディベート「九州大学・梨花女子大合同授業」(韓国梨花女子大学校英文科・言語文化研究院共同主催) 韓国梨花女子大学校教員学生を招聘して「学術英語C・集中演習」として開講。 2021年1月15-17日 オンライン開催
International Workshop for Teaching Debate and Argumentation Education 2021 (ディベート教育国際研究会主催、九州大学ウェビナー100の予算補助による) 米国イリノイ州立大学の研究者による講演。 2020年3月13日 オンライン開催
第7回ディベート教育国際研究会大会 (ディベート教育国際研究会主催、言語文化研究院は共催) ディベートと議論教育に関する研究発表、実践報告。 2020年3月14-15日 オンライン開催
R03年度
共創学部専門科目「レクチャーシリーズ」日米交歓ディベート (日本社会人ディベート連盟(JBDF)) JBDF チーム対全米代表チーム) をオンライン視聴しフローシート (議論の記録) と判定票を提出。

2021年6月5日 オンライン参加 ディベート論題・論点勉強会（福岡県高等学校英語教育研究部会主催） 議論法の講義・論題解説の講義、高校生の論題分析の補助を行った。 2021年7月17日 香住丘高校（対面とオンライン併用）
第7回国際日本語ディベート講座（ディベート教育国際研究会・日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催） 講座と大会。九州大学基幹教育総合科目でもある。 2021年8月22-29日 オンライン開催
第18回JDA九州ディベート講座（JDA日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催） ディベートを教育活動に取り入れたいと考えている教職員、院生を対象とした講座。九州大学基幹教育科目でもある。 2021年11月13日 九州大学伊都キャンパス
第19回JDA九州ディベート大会（JDA日本ディベート協会九州支部主催、言語文化研究院は共催） 競技会。 2021年12月12日 オンライン開催
第8回ディベート教育国際研究会大会（ディベート教育国際研究会主催、言語文化研究院は共催） ディベートと議論教育に関する研究発表、実践報告。イリノイ州立大学教授をオンライン招聘し、フェイクニュースに焦点を当てた基調講演も開催。 2022年3月5-6日 オンライン開催
国際親善ディベート「九州大学・梨花女子大合同授業」（韓国梨花女子大学校英文科・言語文化研究院共同主催） 韓国梨花女子大学校教員学生を招聘して基幹教育オープン科目「九州大学ディベート・スピーチ」として開講。 2022年2月19-20日 オンライン開催（九州大学学生のみ対面）

* 関連行事について<表 14>の井上奈良彦の項、<表 38><表 39>を参照。

<表 37>「外国語週間」

H28 年度	2016年度 講演会（言語文化研究院主催） ・韓国農楽（サムルノリ）講演、2016年10月3日 ・スペイン語の世界への招待、2016年10月11日 ・フランス文化講演会、2016年10月13日 「国語」から旅立って：私のパスポートはニホン語、2016年10月14日
H29 年度	2017年度 講演会（言語文化研究院主催） ・ドイツでの勉強と生活、2017年12月4-7日 ・東アジア映画の最前線、2017年12月4日 ・描かれた日常：オランダ絵画の魅力をめぐって、2017年12月5日 ・What is debating?、2017年12月6日 ・地域文化を世界に発信：『ある女工記』をプロデュース、2017年12月11日 ・精神の危機と夢見る者たち：世紀転換期のフランスとロシア、2017年12月14日 ・韓国の国民的詩人～尹東柱の詩と生涯、2017年12月20日
H30 年度	2018年度 講演会（言語文化研究院主催） ・黄河、揚子江の水を北京へ、2018年12月3日 ・ドイツで音楽を研究する、2018年12月3日 ・フラメンコのカンテ・ホンドの世界、2018年12月12日 ・機械仕掛けの人間のための未完成の戯曲、我思わずとも世界はあるのか？2018年12月3日 ・隣国を「編集」する、2018年12月19日 ・映画：ディベートチーム、2018年12月19日
R01 年度	2019年度 講演会（言語文化研究院主催） ・アジア美術の100年を旅する、2019年11月6日 ・会話分析で比べる英語と日本語、2019年11月11日 ・“中国語を仕事に生かす”とは――ある中国法専門家の場合、2019年11月12日 ・ことば と／の 物質性、2019年11月21日 ・ドイツ留学とドイツの生活～日本とのつながりと音楽～、2019年11月26日 ・Buenos Ritmos Latinos～ラテン音楽の素晴らしき世界へ～、2019年11月27日
R02 年度	中止
R03 年度	中止

・高校教科書への関与

表 38 に掲げられているように、本研究院教員（下線部）による高校英語検定教科書に対する貢献が活動として挙げられる。

<表 38> 高校教科書への関与

野村恵造（監修）、 <u>内田諭</u> 、他（共著）『ビジョン・クエスト総合英語 Ultimate』、啓林館.
野村恵造、 <u>内田諭</u> 、他（共著）『Vision Quest English Expression I Advanced: Revised』、啓林館.
野村恵造、 <u>内田諭</u> 、他（共著）『Vision Quest English Expression I Standard: Revised』、啓林館.
野村恵造、 <u>内田諭</u> 、他（共著）『Vision Quest English Expression I Core』、啓林館.

・マルチリンガル交流スペース等

中期計画 3 に「新文系キャンパスに設置予定の外国語学習室において、外国語学習の継続を希望する学部生・大学院生を対象として言語文化自由選択科目の後継科目を開講し、また海外留学を目指す学部生・大学院生に対して留学支援のための体系的な外国語教育を実施する」とあり、中期計画 10 に「文系新キャンパスに開設予定の外国語学習室において、留学準備及び帰国後の学習継続のための高度な外国語教育（英語及び初修言語教育）を実施する」とある。

本学伊都地区イーストゾーンに、令和 2 年度 4 月、計画にある外国語学習室の機能を含めた形で、マルチメディア交流スペース（愛称 EZ ぶらっと）が開設された。文系を中心にしたイーストゾーンの部局が資金を出し合い、伊都地区イーストゾーン協議会のもとに設けられたもので、日本人学生に外国語学習や外国文化に触れ海外留学を目指すための機会を提供し、海外からの留学生には日本語学習や日本文化に触れる機会を提供して、両者を結びつける活動も任務となっており、協議会の定めた運営要項によって、管理運営責任者は本研究院教員が務めることになっている。令和 2 年度と 3 年度に関しては、本研究院研究院長が管理運営責任者を務め、コロナ禍で対面授業も満足に成立しにくく活動が困難な状況の中、専任の職員の雇用、TA の雇用、語学・文化に関する書籍の整備、イベントの企画・運営などに当たった。

計画にある言語文化自由選択科目の後継科目は、英語で一部令和 4 年度から開講されるが、上記の施設においての開講ではない。上記施設はイーストゾーンにある部局で資金を出し合っているため、利用者が公式にはそれらの部局に所属する学部生、大学院生に限られているからである。

この他、本学伊都地区センターゾーンにある SALC（Self-Access Learning Center）という語学・文化の活動施設において、本研究院の後援、本研究院教員の協力のもと、ランゲージ・テーブルの活動が行われている。こちらは基幹教育院の施設（創立時までは本研究院が設置準備を担当した）であるため、利用者に制限はない。

・外国人留学生の TA

中期計画 11 には「TA として外国人留学生を積極的に登用する」とある。

基幹教育言語文化科目における、各年度はじめの計画段階での外国籍の TA ののべ数は下記のようになっており、毎年安定して多くの外国籍の学生が TA を務め、受講者に刺激を与えていることがわかる。

<表 39> 期間中の基幹教育言語文化科目における外国籍の TA ののべ数

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R01 年度	R02 年度	R03 年度
前期	85	133	126	138	115	103
後期	85	114	102	105	100	123
合計	170	247	228	243	215	226

* 基幹教育教務係調べ

・学府担当

本研究院教員の多くが、大学院教育組織である学府にも所属している。期間全体を見た場合、これらの学府担当者（学府教授会構成員）の数が伸びたと言える。令和 3 年度末の教員数は 42 であり、学府担当率は 42.9% であるが、大学院学府構成員が想定されていない助教 5、全学管理人員 4、特定プロジェクト教員 2 を除けば 58.1% になる。対応する学府を持たない研究院としては高い数字であると思われる。

<表 40> 言語文化研究院教員の学府教授会構成員数

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R01 年度	R02 年度	R03 年度
地球社会統合科学府	8.5	9.5	9	9.5	10	9
人文学府	1	1	0	0	0	0
人間環境学府	5	5	6	7	7	7
経済学府	2	2	2	2	2	2
合計	16.5	17.5	17	18.5	19	18

・共創学部担当

共創学部（H30 年度設置）の教育および指導に関して、本研究院から 2 名の専任教員と 1 名の科目担当教員が関わっている。

<表 41> 言語文化研究院教員の共創学部担当

	担当者	担当授業
H30 年度	井上奈良彦（専任）	レクチャーシリーズ、合同チュートリアル
	内田諭（専任）	レクチャーシリーズ、合同チュートリアル

R01 年度	井上奈良彦（専任）	共創基礎プロジェクト1、共創基礎プロジェクト2、 言語コミュニケーション論、レクチャーシリーズ
	内田諭（専任）	共創基礎プロジェクト、言語コミュニケーション論、 レクチャーシリーズ
R02 年度	井上奈良彦（専任）	合同チュートリアル、共創基礎プロジェクト1、 共創基礎プロジェクト2、議論と創造のコミュニケーションA、 議論と創造のコミュニケーションB、言語コミュニケーション論、 ディグリープロジェクト1、レクチャーシリーズ
	内田諭（専任）	合同チュートリアル、共創基礎プロジェクト1、 共創基礎プロジェクト2、言語コミュニケーション論、 言語とコミュニケーションB、ディグリープロジェクト1、 レクチャーシリーズ
	大津隆広（科目担当）	言語とコミュニケーションA
R03 年度	井上奈良彦（専任）	共創基礎プロジェクト1、共創基礎プロジェクト2、 言語コミュニケーション論、議論と創造のコミュニケーションA、 議論と創造のコミュニケーションB、ディグリープロジェクト1、 ディグリープロジェクト2、ディグリープロジェクト3、 レクチャーシリーズ、異文化対応
	内田諭（専任）	共創基礎プロジェクト1、共創基礎プロジェクト2、 言語コミュニケーション論、言語とコミュニケーションB、 レクチャーシリーズ、ディグリープロジェクト1、 ディグリープロジェクト2、ディグリープロジェクト3、 異文化対応
	大津隆広（科目担当）	言語とコミュニケーションA

・その他の授業担当

本研究院教員は、学士課程国際コース（IUPE: International Undergraduate Programs in English）の基幹教育における外国語以外の科目と、21世紀プログラム（共創学部のいわば前身に当たる）の専攻英語科目も担当してきた。

<表 42> 学士課程国際コース向けの基幹教育担当

H28 年度	
前期	Academic Writing and Presentation I（マーク・ローウェンスタイン）
後期	Introduction to Academic English（マシュー・アームストロング、ジョナサン・アレレス）
後期	Introduction to Philosophy（ガブリエル・デカマス）
後期	Language and Communication in Society（スティーヴン・レイカー）
H29 年度	
前期	Academic Writing and Presentation I（マシュー・アームストロング、ルーベン・パーヴェルス）
前期	Argumentation and Debate I（井上奈良彦、ジョナサン・アレレス）
前期	Intercultural Encounters（アンドリュウ・ペインター）
後期	Introduction to Academic English（マシュー・アームストロング、ジョナサン・アレレス）
後期	Global Issues（ショーン・オドワイヤー）
後期	Introduction to Philosophy（ガブリエル・デカマス）
後期	Language and Communication in Society（スティーヴン・レイカー）
後期	Academic Writing II（ルーベン・パーヴェルス）
後期	Argumentation and Debate II（井上奈良彦）
H30 年度	

前期	Academic Writing and Presentation I (マシュー・アームストロング)
前期	Argumentation and Debate I (マシュー・アームストロング、ジョナサン・アレレス)
前期	Intercultural Encounters (アンドリュー・ペインター)
後期	Academic Writing and Presentation II (マシュー・アームストロング)
後期	Argumentation and Debate II (ジョナサン・アレレス)
後期	Language and Communication in Society (スティーヴン・レイカー)
後期	Introduction to Philosophy (ガブリエル・デカマス)
後期	Global Issues (ショーン・オドワイヤー)
R01 年度	
前期	Intercultural Encounters (アンドリュー・ペインター)
前期	Language and Communication in Society (スティーヴン・レイカー)
R02 年度	
前期	Intercultural Encounters (アンドリュー・ペインター)
前期	Language and Communication in Society (スティーヴン・レイカー)
R03 年度	
前期	Intercultural Encounters (アンドリュー・ペインター)
前期	Language and Communication in Society (スティーヴン・レイカー)
後期	Global Issues (ショーン・オドワイヤー)
後期	Introduction to Philosophy (ガブリエル・デカマス)

<表 43>21 世紀プログラム向けの専攻英語科目の担当

H28 年度	
前期	21 世紀プログラム英語 A (マシュー・アームストロング)
後期	21 世紀プログラム英語 B (ジェレミー・ポストン)
後期	21 世紀プログラム英語 C (井上奈良彦)
H29 年度	
前期	21 世紀プログラム英語 A (マシュー・アームストロング)
後期	21 世紀プログラム英語 B (ジェレミー・ポストン)
後期	21 世紀プログラム英語 C (井上奈良彦)
H30 年度	
前期	21 世紀プログラム英語 A (マシュー・アームストロング)
後期	21 世紀プログラム英語 B (ジェレミー・ポストン)
後期	21 世紀プログラム英語 C (ショーン・オドワイヤー)

また、言語文化研究院は基幹教育総合科目(表 48)、大学院基幹教育科目(表 49)も担当している。

<表 44>総合科目の担当

H28 年度	
前期前半	総合科目：映画の世界(鈴木右文、志水俊広、河原大輔)
前期	総合科目：少人数セミナー：九州大学ディベート倶楽部(井上奈良彦)
前期	総合科目：データから眺めるコトバとコミュニケーション(内田諭、大津隆広、土屋智行、横森大輔)
前期集中	総合科目：ディベート教育国際研究会(井上奈良彦)
前期集中	総合科目：Parliamentary Debate in English(井上奈良彦)
後期前半	総合科目：映画を通じて見るアジアと日本(志水俊広他)
後期	総合科目：少人数セミナー：九州大学ディベート倶楽部(井上奈良彦)
後期集中	総合科目：Kyushu-Ewha Joint Winter Debate 2017(井上奈良彦)
H29 年度	
春学期前半	総合科目：映画の世界(鈴木右文他)
春学期	総合科目：ことばの科学(辻野裕紀、倉方健作、土屋智行、劉轟)

春学期	総合科目：女性学・男性学Ⅰ（阿尾安泰、谷口秀子他）
夏学期	総合科目：女性学・男性学Ⅱ（阿尾安泰、谷口秀子他）
前期集中	総合科目：国際日本語ディベート講座（井上奈良彦）
秋学期前半	総合科目：映画を通じて見るアジアと日本（志水俊広他）
後期集中	総合科目：外国語プレゼンテーション（中里見敬）
後期集中	総合科目：Kyushu-Ewha Joint Winter Debate 2018（井上奈良彦）
H30 年度	
春学期前半	総合科目：映画の世界（鈴木右文他）
秋学期前半	総合科目：映画を通じて見るアジアと日本（志水俊広他）
後期集中	総合科目：外国語プレゼンテーション（佐藤正則）
後期集中	総合科目：Kyushu-Ewha Joint Winter Debate 2019（井上奈良彦）
後期集中	総合科目：QDO2018: ディベート大会を通して学ぶマネジメントとコミュニケーション
後期集中	総合科目：国際日本語ディベート講座（井上奈良彦）
R01 年度	
春学期前半	総合科目：映画の世界（志水俊広他）
春学期	総合科目：American Popular Culture and Feminism I（井上奈良彦）
春学期	総合科目：Introduction to Communication Studies（井上奈良彦）
夏学期	総合科目：American Popular Culture and Feminism II（井上奈良彦）
夏学期	総合科目：Introduction to Communication Studies（井上奈良彦）
前期集中	総合科目：ディベート教育国際研究プロジェクト（井上奈良彦）
秋学期前半	総合科目：映画を通じて見るアジアと日本（志水俊広他）
後期集中	総合科目：外国語プレゼンテーション（中里見敬）
R02 年度	
通年集中	総合科目：九州大学ディベートプロジェクト（井上奈良彦）
後期集中	総合科目：英語コミュニケーション能力と TOIEC（井上奈良彦）
後期集中	総合科目：外国語プレゼンテーション（阿部吉雄）
R03 年度	
通年集中	総合科目：九州大学ディベート・スピーチ プロジェクト（井上奈良彦）
後期集中	総合科目：英語コミュニケーション能力と TOIEC（井上奈良彦）
冬学期	総合科目：ロシア・ソ連史を振り返る（佐藤正則他）
後期集中	総合科目：外国語プレゼンテーション（辻野裕紀）

<表 45> 大学院基幹教育の担当

H28 年度	
前期集中	アウトリーチ 1（倉方健作）
後期集中	ディベート（井上奈良彦他）
H29 年度	
前期集中	アウトリーチ 1（倉方健作）
後期集中	ディベート（井上奈良彦他）
H30 年度	
前期集中	アウトリーチ 1（倉方健作）
後期集中	ディベート（井上奈良彦他）
R01 年度	
前期集中	アウトリーチ 1（倉方健作）
後期集中	ディベート（井上奈良彦他）
R02 年度	
前期集中	アウトリーチ 1（倉方健作）
後期集中	ディベート（井上奈良彦他）
R03 年度	
前期集中	アウトリーチ 1（倉方健作）
後期集中	ディベート（井上奈良彦他）

・学務部 TOEIC プログラムへの支援

本研究院では、学務部キャリア・奨学支援課が平成 17 年度から実施している TOEIC プログラム「英語コミュニケーション能力育成プログラム」について、カリキュラム作成・講師選定のコーディネートで支援してきた。令和 2 年度より基幹教育総合科目「英語コミュニケーション能力と TOEIC」(担当教員：井上奈良彦)として単位認定されるようになった。

【国際】

・交流協定の概要

中期計画 8 に「上海外国語大学、北京外国語大学、イルクーツク国立大学等と積極的に研究者の交流を行い、共同プロジェクト、国際会議を立案する。フルブライト・プログラム等、学外の国際交流事業に積極的に参画する。」、中期計画 10 に「上海外国語大学日本文化経済学院学術交流協定、北京外国語大学北京日本学術研究センター学術交流協定、イルクーツク国立大学人文・外国語・メディアコミュニケーション研究所学術交流協定、ケンブリッジ大学ペンブローックカレッジ学術交流協定等を通して、学生・教員の派遣及び学生・教員の受け入れを推進する。」とある。

現在本研究院における期間中の部局間交流協定の締結状況は表 46 のとおりである。

<表 46> 交流協定の締結状況

相手国	相手方	学内共同締結	協定種類	締結時期	最新更新	終了時期
英国	ケンブリッジ大学 ペンブローックカレッジ	本研究院 単独	学術	2000/10	2020/10	---
ドイツ	ルール大学 州立言語研究所	本研究院 単独	学術	2014/9	---	2019/9
スペイン	バルセロナ自治大学 翻訳・通訳学部	本研究院 単独	学術	2014/10	---	2019/10
中国	上海外国語大学 日本文化経済学院	地球社会 統合科学府	学術 学生	2015/8	2020/8	---
ロシア	イルクーツク国立大学 人文・外国語・メディアコミュニケーション研究所	地球社会 統合科学府	学術	2017/10	---	---
中国	北京外国語大学 日本学術研究センター	比較社会 文化研究院	学術	2018/12	---	---

この他、本研究院は、表 47 のように、それぞれの相手方とのゆかりが本研究院教員にあって、大学間交流協定の共同提案部局になっている。

<表 47> 交流協定賛同部局としての参画

相手国	相手方	学内主提案部局	協定種類	締結時期
ドイツ	アーヘン工科大学	工学研究院	学術／学生	2020/8
オーストリア	ウィーン大学	法学研究院	学術／学生	2020/8
中国	華東師範大学	人間環境学研究院	学術／学生	2020/9

上海外国語大学日本文化経済学院との交流としては、表 10 にも記述があるが、表 48 にあるとおり、毎年主催校は異なるものの、東アジア言語文化フォーラムのいずれの回にも上海外国語大学側の教員・大学院生の参加があり、交流を図っている。このフォーラムは、本研究院と上海外国語大学日本文化経済学院（時期によっては仁川大学校も）が構成する東アジア日本語・日本文化研究会（2021 年 9 月 23 日からは東アジア言語文化研究会に改称）

が関係海外大学と交代で開催しているものである（詳細は表 10 第 1 項目を参照）。

<表 48> 期間中の東アジア言語文化フォーラム開催状況

	回	実施日	主催部局所属大学	実施形態
H28 年度	第 18 回	2017/2/4	日本・九州大学言語文化研究院	対面
H29 年度	第 19 回	2018/3/17	韓国・仁川大学校	対面
H30 年度	第 20 回	2019/3/16	中国・上海外国語大学日本文化経済学院	対面
R01 年度	第 21 回	2020/2/22	日本・九州大学言語文化研究院	対面
R02 年度	第 22 回	2021/3/20	日本・九州大学言語文化研究院	オンライン
R03 年度	第 23 回	2022/3/26	中国・上海外国語大学日本文化経済学院	オンライン

この研究会では、表 49 のように、毎年両校関係者の協同により学術誌が刊行されてきている。

<表 49> 研究会学術誌「東アジア日本語・日本文化研究」の発行状況

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R01 年度	R02 年度	R03 年度
号	第 22 集	第 24 集	第 26 集	第 28 集	第 29 集	改名第 1 集
発刊時期	2017/2	2018/2	2019/2	2020/1	2021/1	2022/2

* 第 23 集、第 25 集、第 27 集は韓国内で独自発行。* R03 より『東アジア言語文化論叢』に改名。

北京外国語大学北京日本学研究センターについては、本学比較社会文化研究院主導であり、残念ながら現在のところ本研究院を含めた動きはない。

イルクーツク国立大学人文・外国語・メディアコミュニケーション研究所については、専門日本語教育学会の招聘で訪日された際、令和元年度に本研究院を研究者 2 名が訪問され、互いの部局の研究状況を確認し、出席者の研究分野についての情報交換を行った。

この他 Towson University の Desirée Rowe 博士をフルブライト研究員として令和元年度前期に招聘し、授業へのゲスト参加による交流等があった。

・教育上の国際業務

中期計画 7 には「ケンブリッジ大学英語・学術研修、中国語海外語学研修、韓国語海外語学研修、ドイツ・インターンシップ研修等の海外研修事業を継続・発展させ、参加学生数を増加させる。留学生の受入れについては、地球社会統合科学府等と連携し、大学院生および研究生の受入れを積極的に図る。」、中期計画 10 には「交流協定等を通して、学生・教員の派遣及び学生・教員の受け入れを推進する」とある。

ケンブリッジ大学ペンブローク・カレッジについては、同カレッジが力を入れて実施している国際プログラムのうち、特に短期のものについての実施方法について、毎夏九州大学の

学生向けのプログラム（「ケンブリッジ大学英語・学術研修」のことで、全学の学生を対象にしている）が行われる際に、引率教員が現地で現地教員と長時間意見を交わしている。これのおかげで、この研修が充実した形で実施され、身体的障害を持った学生や心因的問題を抱えた学生への対応方法、事前研修のあり方、現地でのフィールド・トリップや週末旅行の計画などの研究が進んだ。この研修の実施状況は表 50 の通りである。またこの研修は、九州大学基幹教育言語文化科目の英語科目として実施されている。第 23 回からは、成蹊大学イーグル・プログラムとの共同催行となっている。成蹊大学がペンブローク・カレッジに現地プログラム創設を交渉した際、九州大学との合同を条件に認めた経緯がある。

<表 50> 「ケンブリッジ大学英語・学術研修」の実施状況

	回	実施期間	参加者数	引率教員
H28 年度	21	2016/8/15-2016/9/8	29	鈴木右文、内田諭
H29 年度	22	2017/8/15-2017/9/8	29	鈴木右文、内田諭、井上奈良彦
H30 年度	23	2018/8/19-2018/9/12	29	鈴木右文
R01 年度	24	2019/8/18-2019/9/11	28	鈴木右文、C. Haswell
R02 年度	中止			
R03 年度	中止			

この他、交流協定に基づくものではないが、本研究院の運営する海外短期研修プログラムとして「ドイツ・インターンシップ研修」がある。この研修の実施状況は表 51 の通りである。

<表 51> 「ドイツ・インターンシップ研修」の実施状況

	回	実施期間	参加者数	引率教員
H28 年度	第 13 回	2017/2/25-3/26	2	A. Kasjan
H29 年度	第 14 回	2018/2/23-3/26	4	A. Kasjan
H30 年度	第 15 回	2019/2/21-3/26	3	A. Kasjan
R01 年度	第 16 回	2020/2/27-3/18（中途短縮）	4	A. Kasjan
R02 年度	第 17 回	中止	--	--
R03 年度	第 18 回	中止	---	---

* 中止した年度でも回に含めている。

* 第 17 回現地研修は中止、毎週勉強会を実施、Zoom でドイツの職業学校の生徒と独日文化について交流。

また、本研究院教員が多く所属している大学院地球社会統合科学府へ、上海外国語大学日本文化経済学院から、学生交流協定に基づく交換留学（半年）の受入が表 52 のように行われて来ている。ここ 2 年間はコロナ禍により中断しているが、終息後は再開できる見込みである。

<表 52> 交流協定に基づく上海外国語大学日本文化経済学院から地球社会統合科学府への留学（半年）

	H28 年度		H29 年度		H30 年度		R01 年度		R02 年度		R03 年度	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
受入人数	2	2	2	2	2	2	2	2	0	0	0	0

さらに、国際部が統括している外国語関係の短期留学プログラムがいくつかあるが、本研究院が言語文化科目への単位認定に関与しているものだけで表 53 に示したものがあり、コロナ禍での中断は致し方のないところだが、着実に実施してきていて、学生の留学志向の動機付けに一役買っているといえる。

<表 53> 国際部統括の外国語関係短期留学プログラムと参加人数

		シリコンバレー 英語研修	モナシュ大学 英語研修	ファーストステップ 英語研修	ファーストステップ 英語研修	CLP-C (中国語)	CLP-K (韓国語)
		米国	豪州	カナダ		台湾	韓国
		シリコンバレー州大	モナシュ大	B.コロンビア大	ビクトリア大	台湾師範大	延世大
H28 年度	前期	39	46	創設前		8	8
	後期	8/27-9/26	2/28-3/19			2/28-3/18	3/2-3/25
H29 年度	前期	27	39	11	7	8	2/25-3/17
	後期	8/18-9/24	2/17-3/18	8/27-9/24	9/4-10/1		
H30 年度	前期	中止	23	15	14	17	3/3-3/23
	後期			2/16-3/17	8/26-9/23		
R01 年度	前期	中止	28 ※	15	17	コロナ中止	廃止
	後期			2/15-3/15	9/8-9/29		
R02 年度	前期	中止	コロナ中止	13 □	15 □	20 ※	2/22-3/15
	後期			2/23-3/21	3/1-3/19		
R03 年度	前期	中止	11※△ 8/2-8/20 8/9-8/27 8/16-9/3	コロナ中止	コロナ中止	コロナ中止	
	後期						

* □はコロナの影響で繰り上げ帰国。※はオンライン。△は参加者により日程が異なる。

* シリコンバレー英語研修は九州大学カリフォルニアオフィスが主導。モナシュ大学英語研修は日本の数大学による共同プログラム。ファーストステップと CLP は国際部主導によるプログラム。

・その他の国際研究者交流

中期計画 4 には「各部門・講座・研究グループ等の単位で外部資金（科研費、海外研究者招聘制度助成金など）を確保し、国内、国外から一定期間、研究者を招聘し、講座、部門、言文全体を単位とした専門的研究交流、また異なる分野の研究交流を行う。」、中期計画 5 には「海外の大学等に所属する研究者との共同研究を積極的に推進する」とある。

これらについては、前項の上海外国語大学日本文化経済学院との研究交流およびイルク

ーツク国立大学との研究交流があった。この他、Towson University の Desirée Rowe 博士をフルブライト研究員として令和元年度前期に招聘し、研究上の交流があった。この他、表 14 に記した海外研究者を招いての研究交流が図られた。

・国際協力

中期計画 9 には「内外の国際開発協力に関するネットワーク構築に加わると同時に、所属教員の専門性を活かした国際的なプロジェクトに参画する。」とある。

この点で鈴木隆子准教授が、開発途上国の農村における初等教育をテーマに研究を実施しており、科研費基盤研究(B)「途上国農村地域における初等教育の教育成果に関する調査－コロンビアでの追跡調査」の代表として、分担者、協力者を含めてのべ 16 名の体制でこの国際調査プロジェクトを遂行した。その研究成果の発信として、外国人研究者を招請して国際ワークショップを行っている。表 54 のとおりである。

<表 54> 該当する科研費（「科学研究費助成事業データベース」より）と国際ワークショップ

<p>科研費基盤研究(B) H25/4-H31/3 代表(分担5名、協力10名) 題目： 途上国農村地域における初等教育の教育成果に関する調査－コロンビアでの追跡調査 【研究成果の概要】 21世紀型人材育成において、認知的能力と共に非認知的能力を身に着けることはこれまで以上に重視されている。当研究は教育の質に定評があるコロンビアのエスクエラヌエバ小学校の卒業生の追跡調査を行うことによって「教育成果」を明らかにしようとした。先行文献から抽出した「自律学習」「自尊心」「民主的態度」を非認知的能力を測る指標とし、2014年に小学校を卒業したばかりの生徒約1000人に質問票を配布した。その結果「自律学習」が「教育効果」として実証された。同じ生徒が中学最終年になった2017年に再度調査し比較分析した結果「自律学習」への影響は見られなかったため、「教育効果」の維持が困難なことがわかった。 【研究成果の学術的意義や社会的意義】 国際教育開発において「教育の投入」「教育過程」「教育効果」の研究については比較的多くの調査が実施されているのに対し、より深く長期的な調査を必要とする「教育成果」についてはあまり多くない。しかし持続可能な教育開発のために、教育投資根拠として「教育成果」を示すことが求められる。そこで当研究は、時間のかかる追跡調査を行うことによって、小学校の学習内容が国家社会あるいは卒業生個人の人材育成において社会便益および個人便益をもたらしているのかどうかを検証し、その「教育成果」を明らかにすることによって、教育制度の改善を目指す。</p>
<p>国際ワークショップ H30/11 九州大学伊都キャンパス 題目： Multigrade Teaching Workshop 外国人研究者を招請して開催した。この分野の専門家と成果を共有するとともに、類似研究及び国際的動向を共有し、相対的な知の構築を目指した。(イギリスから1名、スリランカから1名を招聘)</p>

【社会連携】

本研究院では、隔年にて公開講座を主催している。表 20 に期間中に実施された 3 件の公開講座が記されている。表 55 として再掲しておく。

<表 55>実施された本研究院主催の九州大学公開講座

H29 年度	九州大学公開講座（言語文化研究院主催） 「異文化理解へのアプローチ：文学、メディアを通して」 （異文化理解を文学、メディアといった観点から解きほぐす。） 2017 年 10 月 28 日～11 月 25 日 5 回 10h
R01 年度	九州大学公開講座（言語文化研究院主催） 「ことば研究における多面的アプローチ」 （コミュニケーションやその基礎となる言語の真相に対する多面的アプローチを解説。） 2019 年 11 月 23 日～12 月 21 日 5 回 10h
R03 年度	九州大学公開講座（言語文化研究院主催） 「ゆらぐ人間像－近現代における思想と芸術のダイナミズム」 （19-20 世紀西欧での人間の身体・生命・精神等の変化と芸術・文学との関係を論じる。） 2021 年 11 月 20 日～12 月 18 日、オンライン開催

<表 56>実施した高大連携英語教育懇話会

H28 年度	内容：九州大学における英語教育カリキュラムの紹介 高校現場での英語教育の現況 場所：九州大学伊都キャンパス比較社会文化言語文化研究教育棟 3 階 321 号室 参加：11 名（高校側から） 2017 年 3 月 30 日
H29 年度	内容：高大連携英語ディベート講座 場所：九州大学伊都地区センター 3 号館 3213 教室 概要：井上奈良彦教授による「学術英語認定科目」（英語政策ディベート集中講義）を、高大連携活動の一環として、高校の先生方に公開した。アメリカのディベート教育専門家が基礎から練習試合を行うまでを指導するもの。 2018 年 3 月 13-16 日
H30 年度	内容：共創学部スタート：英語教育を中心に 2018 年度新英語カリキュラムの挑戦 場所：九州大学伊都地区イースト 1 号館 2 階 E-C-202 マルチリンガル交流スペース 参加：24 名（高校側から） 2019 年 3 月 27 日
R01 年度	新型コロナウイルス蔓延の影響により未開催
R02 年度	新型コロナウイルス蔓延の影響により未開催
R03 年度	新型コロナウイルス蔓延の影響により未開催

【その他】

・事務体制・業務

中期計画 12 には「文系地区の伊都キャンパスへの移転の進捗状況等及び教育研究組織の改変等に合わせ、文系地区の事務体制の統合再編を行うとともに、業務のあり方を継続的に見直し、業務の効率化・合理化等の業務改善を図る。」とある。

本研究院が平成 30 年 4 月に伊都キャンパス内でセンターゾーンからイーストゾーンに比較社会文化研究院とともに移転した後、平成 30 年 10 月に箱崎文系地区の部局が移転してイーストゾーンに合流したが、その際に言文を担当する比較社会文化学府等事務部は、人文社会科学系事務部に改組され、新しい環境で必要な変貌を遂げた。第 3 期中には、定時退勤日の定期的周知、時間外労働についての労使協定遵守の注意喚起や指導、合理化可能な業務の洗い出しや教員からの要望への回答などを行っている。

・管理経費節減

中期計画 13 には「全学的な既存業務や調達方法等の見直しに沿って、部局管理業務の仕様等の見直し及び光熱水費等の節約を進め、さらなる管理的経費の抑制を図る。」とある。

第 3 期期間中（平成 28 年度～令和 3 年度）に、本研究院は平成 30 年 4 月に伊都地区センターゾーンからイーストゾーンへ移転し、さらに平成 30 年 10 月には箱崎文系地区の伊都地区イーストゾーンへの移転があったため、平成 28 年度、本研究院の移転準備作業を行った平成 29 年度、箱崎文系地区からの合流があった平成 30 年度、その直後の令和元年度では、建物管理体制の相違、備品や消耗品等の調達その他による環境の変化のために、年度間の支出の節減等の度合いを比較することができない。また、令和 2 年度はコロナ禍のために令和元年度との比較がやはり難しい。敢えて両年度を自身で制御可能な支出項目について比較すると、令和元年度に比べて令和 2 年度の執行額は、光熱水料・清掃等で 73.3%、複写機維持費で 88.9%、通信費で 65.4%となっはいるが、コロナ禍による自然減であろうと考えられる。

・自己点検・評価

中期計画 14 には「部内の自己点検評価委員会を中心として、定期的に部局構成員の教育研究活動、国際交流活動等の状況を調査し、その結果に基づいて、教育研究活動、国際交流活動の活性化を促進する方策を導入する。ホームページ、刊行物等により、部局の活動状況を継続的に公開・発信する。」とある。

これについては、本研究院の自己点検・評価委員会が、各教員が大学の教員活動進捗・報告システムによって入力して九州大学研究者情報に掲載されている情報を随時点検して、必要があれば個別に助言を行うことになっている。また、今期の第 3 期については、同委員

会の統括のもとで本報告書が作成された。さらに、令和2年度に定められた本研究院の「部局独自の評価基準」（非公開）についても、自己点検・評価委員会の手によるものである。

・法令遵守、安全衛生等

中期計画15には「部局の業務分掌、人員配置、安全衛生管理体制を定期的に検証し、職場環境の安全衛生を確保・維持する。」、中期計画16には「法令遵守への意識の向上を図るため、法令遵守に係るFD等を実施する。日本語を母語としない構成員に対する法令遵守支援体制を整備し、部局全体の法令遵守基盤を強化する。」とある。

本研究院の伊都地区イーストゾーンへの移転後の院長は、九州大学人文社会科学系安全・衛生部会の委員を部局代表として務め、部局内またイーストゾーン内の労働安全・衛生面について、喫煙防止対策やキャンパスの危険箇所の指摘などの業務を担ってきた。特に令和2年度においては、上記部会の親委員会である伊都地区センター・イースト事業場安全・衛生委員会にも出席し、事業場全体の安全・衛生体制にも参画した。

法令遵守に関しては、大学が用意した研究倫理教育、研究費の運営・管理に係るコンプライアンス教育、個人情報保護研修、営業秘密に係るeラーニングを各教員が受講し、研究院長は教員に受講の案内を行い、受講状況の把握に努め、日本語を母語としない教員には英語による補足案内を行った。部局FDとしては、「雇用均等のための工夫ー女性研究者増加に向けてー」や「研究費の適正な執行について」を実施した。この他、科研関係の決まりが変更される際に教授会で説明を行う、ハラスメントに係る啓発会合を行うなど、法令遵守のための諸活動に取り組んできている。

・FD

中期計画6には「FD等の活動、部内における業務・人員の適正配置等を通して部局の教育研究環境をさらに改善し、教育研究活動その他の業務における女性教員、外国人教員の比重を高め、部局全体の教育研究力の向上を図る。」、中期計画16には「法令遵守への意識の向上を図るため、法令遵守に係るFD等を実施する。日本語を母語としない構成員に対する法令遵守支援体制を整備し、部局全体の法令遵守基盤を強化する。」とある。

本研究院では、教授法の改善・研究、および科研費申請に関するFDがきわめて活発かつコンスタントに行われており、教員の教育・研究能力の向上に資するものとなっている。また中期計画6および16に関連して、男女共同参画推進室や人社系事務部財務課から講師をお招きして、女性教員比率の上昇や法令遵守への意識の向上を図るセミナーを開催した。また令和2年度には、出産・育児のために研究教育への支援教員が雇用される制度について、助教、講師にしか適用されていなかったのに対し、関係委員会に働きかけ、職階に関係ない適用を実現し、研究教育環境の向上に貢献した。さらに日本語を母語としない構成員に対する法令遵守支援体制の整備に関しては、事務部の尽力により各種マニュアルの英語版が整

備されつつあるが、部局として FD で取り上げるには至らなかったが、教育・研究関連の FD では外国語を併用したり、外国人教員が講師を務めるなど、日本語を母語としない構成員が積極的に参画している。

<表 57>期間中に実施した FD

日付	実施単位	題 目
H28 年度		
6/20	学科	効果的な声調指導を目指して
6/21	学科	あさましき言語教育観からの脱却への序章：功利性を超えて
7/22	学科	授業に「話す」を位置づけるために：タスク活動を超えた〈言語場〉を求めて
9/29	部局	男女共同参画 FD：九州大学における男女共同参画推進の取組み
1/20	学科	試論：言語教育にとって文化とは何か
1/26	学科	言語文化科目における「文化」：相原茂著の中国語教科書 2 種をとおして
1/30	学科	中国語教科書における問題点とその解決を目指して
H29 年度		
7/27	部局	ワーク・ライフバランス推進 FD：介護と仕事の両立セミナー
7/24	学科	詩へ/から：〈読むこと〉をめぐって
7/25	学科	中国語発音学習におけるフォニックス (phonics) の利用について
H30 年度		
5/18	学科	中国語入門教育におけるアクティブラーニングの導入 (1)
5/24	部局	九州大学学術情報リポジトリ (QIR) 登録方法について
5/25	学科	中国語入門教育におけるアクティブラーニングの導入 (2)
7/19	部局	科学研究費取得説明会
8/09	部局	Presentation Skills Taught At Nagoya University Writing Center (Mei-Writing)
R01 年度		
4/08	学科	中国語発音教育における知覚訓練の実施方法および補助教材の開発
4/15	学科	中国語の母音と子音の発音指導について
4/22	学科	韓国語教科書－韓国語教師の誤謬を別決する：文字と発音を中心に
7/25	部局	雇用均等のための工夫 －女性研究者増加に向けて－
10/10	部局	科研 FD
11/12	学科	ハングル入門時に語源から知る韓国語
12/10	学科	中国語学習における音楽教材活用の試みと課題
1/14	学科	飾りの”很”はどこまで必要なのか
1/28	学科	名詞と動詞のあわい：日韓対照言語学の視角から
2/03	学科	初学者に立ち返る：粵語学習の経験から (1)

2/06	学科	初学者に立ち返る：粵語学習の経験から (2)
R02 年度		
5/27	学科	中国語オンライン授業 FD
9/16	部局	オンライン授業における工夫
9/23	部局	科研 FD 科研獲得の戦略について：経験者に聞く
11/16	学科	中韓合同 FD：遠隔授業におけるテストの工夫
2/04	部局	アカデミック・ライティング&プレゼンテーション教材開発：英語で科学するアクティブ・ラーナー育成に向けて
2/08	学科	中級中国語の教育方法について
3/25	部局	英語新カリキュラム FD：Q-LEAP3ーグローバルな人材の育成に向けて
R03 年度		
4/01	学科	中国語の発音教育について
7/01	部局	オンライン授業における工夫 (2)：Moodle でのテスト
7/15	部局	科研 FD
7/29	部局	研究費の適正な執行について